091221-000-2

特12-444

鼠小僧白浪双紙

春陽堂

M18

DBN-2071

特12
444

明治十八年十一月廿日内務省賜付

鼠小僧白涙双紙卷之上

第一回

四海波静かにして治る御代濱の真砂い盡るとも世ゑ盗人の種い盡まじき云葉實わ確言あり鼠吉兵衛由來の事並わ養子次郎吉生立の事

昔と鼠小僧と云へるものあり父い鼠吉兵衛とて博奕を業とする者あるゞ其子次郎吉い若き時より悪事はゞ聳されて終に身を刑場ゑ失おふ其起りを尋ぬるゑ抑も其頃紀伊國屋藤左工門と云ふものあり藤佐ゞ木家の浪人おりしが次第わ零落れて今い何營む業とてもおく漸〳〵日暮おくしを其日を送り細き煙りをも立てうぬるほどなりしが孔が中へ去年の夏とうらぜ男子を設けゝれば中〳〵毓つべき手段もおくいかゞわせんと夫婦相談すれども兎角良き分別もなく迎も手元わあり〳〵辛苦目見せんよりい棄て悲悲ある人に拾われおゞ行末善人ともおるべしと夫婦相談究まり子の顔をつく〴〵打眺め涙を流し是ぞ一生の別れと母い乳ふさを含ませ澤山わ飲せて其夕昏人しれぞ或る町家の門ゑ捨けるを往來の人之を見つけ浩る玉の樣おる男子を拾るといよく〳〵の事おらん倖ひ我れわ子なければ拾ひあげて養育せんと

抱ひ歸りしい其頃世ゐ隠れなき博奕打の鼠吉兵衛といふものあり數年博奕の宿をして身い何不自由なく常ゑ食客の七八人も絶へぞ居て晝夜金錢の音たへぞ乳母を雇ふて夫婦もろとも蝶よ花よと育々るが光陰ゐ關もりあく今日と過明日と經て茲に十二歳れ春を迎へたるい名い次郎吉とて利口發明にて萬事物ゐ賢しく子分子方ゑもて嘶され何不自由あく暮しける此の次郎吉い如何ある因縁ゑや我ものを惜氣なく人に遣ひすことを悦こび後にい金銀を塵芥の如くに遣ひ棄て成長ゐ及んでい酒食に遣ひ遊里ゐ耽りて自然ゐ金銀ゐ差支へるものゑら竟ゑい博奕場へも入込ゑ益〳〵放蕩に身を持崩せしゞ或る夜ゐまりゑ金に究せしまゝ不圖善からぬ心を起し或る大家の土藏の窓を押破り忍び入りて穴藏の錠ゑ撚切り一音ゐ此の家の主人ゞ聞つけて扨い盗賊の入しよと叫き立つれバ次郎吉い早くも聞ハ付て元の窓を潜り出て見れば人々い皆な土藏の口へ押よせて店にい一人も居ゞざるバ是れ幸ひと見世へ上り賣溜の錢七八貫文を奪ひとり逃出せしゞ是ぞ盗人の手始といゐまりにける

第二回　福原重右衛門悴初五郎放蕩の事　並ゐ鼠吉兵衛を賴ゑ食客の事

爰に次郎吉の養父吉兵衛い壯のりし時福原重右衛門と云ふものゐ命を助けられし事あり大恩受けゑ其悴に初五郎とて年二十一歳れ壯者あり玄が是も遊女と博奕に身を窶し金銀に支迫ゞし所ろより殿の御納戸金七十両ゐまり盗みとり欠落せしが今は銀子も遣ひあくして身の置ところあきより親重右衛門の縁引を以て鼠吉兵衛を賴み食客とありて朝夕水を汲み米あゞ炊ぎ居たりしゞ或る日井戸端ゐて兼て見覺へある屋敷もの四五人ゐ見咎められ内ゐ逃入りしゞ逃をゞたく竟ゑ引立て行られしを吉兵衛い忽駭し零時手を拱ひて考ゞへしい親重右衛門殿ゐい我大恩ある身の上今ま初五郎ゐ看す〳〵命を棄てさせんも本意にあらぜ今こそ命の恩報を爲すべきの時至をりと金子七十兩を取り出し早速屋敷へ持參して申しゞるゑふ私儀い初五郎を世話致し置候ろふ者に御座候ろふが今日御達ゐつき渠が舊惡を承まりり恐入り奉り候就ていい私儀初五郎ゐ代り右金子殘らぜ辨償仕つるべく間何卒其罪を御宥免成下され初五郎の身は親重右衛門始じめ初五郎家内一統私まで下し置れ度と只管懇願しければ官吏磯中權太兵衛も吉兵衛の志ゑ感じ然らバ一存ゑも參らぬことも〻へ明日まで待べしとて其日い吉兵衛も家に歸りしが偖翌日ゐ呼出に付罷出げるゐ磯中權太兵衛い吉兵衛を呼びて申しける樣先般初五郎儀大金を盗とり逐電致しゐ上を輕しめ親の難儀を省みぬい忠

孝の道を失ふ其罪輕からぞ中〳〵助命の儀叶ひがたし然るところ此度御上ゐて重き御法事之れあるに付重右衛門い永の御暇仰つけられ初五郎儀は門前拂ひよ仰つけられ其上吉兵衛へ両人とも引渡し申べし金子い御取上のうへ不埒金と成され候と仰付ふれければ吉兵衛いありがたき旨御請を申上重右衛門初五郎の両人を引連我家へ歸りける重右衛門い種々忿痛したるが原にや不圖煩い付ければ吉兵衛い厚く世話ゐし醫師を招き藥を與へ一方ゐらぬ介抱ゐ初五郎も七十両の金を贖ひ貰ひ其上親子世話よゐりて剩さへ病氣の厄介よまでなることもへ万事の禮を厚く述べ此の大恩い何時の世にも酬もべき斯成行上い家人同様よ侍使ひ下されと只管賴みゐるうちに重右衛門い次第〳〵よ病重り終よ空しくありければ初五郎の歎きい云ふも更なり吉兵衛も名殘を惜をしゞ偖あるべきゐあらねば泣〳〵野邊の送りを濟し後悲ごろよ弔ひゐる去る程よ次郎吉の惡事い愈〳〵募り今日しも家を出しまゝ三四日過ぎぬれど歸らぬもへ吉兵衛夫婦い類りに案じ若や神隠しゐぶんゐと占ひ祈禱と日々の費大方ゐらぞ初五郎も両親の心を察ぜて四方を探せしゐど更よ行衛わゐらぞ如何せんと歎く双親の心い露べゐりゐ察せぬ次郎吉い先ゐら先へ惡事をゐし盗みてい遣ひ〳〵てい盗み

て日を暮すうち或日居酒屋にて酒食ゐす四五人の飲仲間一人の云へるよふ今い大きい親分と云へば大坂は淀淀辰ゐり手下の四五十人もゐり大博奕打の咄ゐい世上に隠れなけもど質い大盗賊といふことよて嚴しき詮儀ゐり併し其中をくゝり拔けて甘ひ仕事を爲すい中〳〵の代者ゐりと云ふを傍に聞き居し次郎吉いつく〳〵と思ふよふ昔の蜂須賀小六熊坂長範日本左衛門石川五右衛門などい世にな盗賊ゐれども末世まで名を止めゐり我も乘ゐゝりし舟ゐをば惡名ゐりとゐ名を遺さん左するよい容易の事よてい爲しがさし思ふに世界の金銀い兎角不廻りよて金持いいよ〳〵富み貧乏人います〳〵貧よ陷り金持三分に貧乏人七分ゐれば願くは世界の金銀を平均ゐ押しゐらして世の中を安樂ゐせゞ後世ゐ我名を止むることを得む日本中の金銀を我一人丹誠して盗み出さん去りながら手始よい後立ゐくてい叶わじ夫れゐい今聞きし淀辰こそ至當ならめと胸に問ひ胸よ答へて頓て居酒屋を立出で直に旅粧ひをゝしてい我家を後よ品川さして東海道に上りしい大膽不敵と知られゐり

第三回　川崎宿より次郎吉ゐ降魔蠅付事　並よ次郎吉此者を手先ゐ使ふ事

去る程に次郎吉い早や川崎宿に到りければ夫より馬ふ打のり煙草くもふ吸ながら馬士と四

方八方の咄しおどして行跡遥より若旦那〳〵と呼びゝくるものあり次郎吉後振りのへりて見れども更ゐ覺へおき人ゆへ定めし親父の博奕仲間おらんとよき程に挨拶おし某しい伊勢へ拔參りおすものゝへ道遠をよおらんと云へバ彼の男い得たりと思ふ心を色よも見せず私しも尾州の名古屋まで用事ありて參るものおきば一人よて餘り徒然しゆへ失禮おごら汚呼留申せしおりゐ一所よ伴連下さるゝおれバ此上おき幸ひと夫より同道して行程よ早や神奈川ゐ着きけれバ此所にて晝食せんと二人或る飯屋お入りけれど彼の男い宿の女よ馴〳〵しく話しおどする樣子如何にも怪しけれど次郎吉い知らぬふりして居しに又も此方に向ひ旦那爰ゐて緩〳〵支度を爲さん是より先い新町ゐて戸塚へい未だ二里おまりあり此の戸塚といふい往古盜賊多く居て所々へ押入り或い旅人を惱ますこと大形おらず又爰に不思儀おるい或夜夫婦の旅人を撃殺したる盜賊おりしゐ其妻鬼とおりて毎夜泣叫び或夜武士ゐ向ひて委細を物語りしのば夫より事顯われて十人の盜人を召捕磔刑に行ひ其死骸を擧んし所へ十塚（戸塚い幾の誤り）と云ふおど斷しの所へ誘への酒肴來りけれバ茶屋の女ゐ酌おど取せて大ゐ酩酊せしに彼男い時分ゝ測に小便に行ふりして二階を下りしに次郎吉も跡より

つゞいて下りけれバ彼の男い南無三と思へども知らぬ顔して小用を足し又二階へ上りける次郎吉も同く上り來て又も肴を取り寄せ時にお前の名い何と申すやと問へバ私い清兵衛と申すゲシテ其許の御名いと尋ねれバ私い次郎吉と申すもの斯く名乘り合ふ上い互ゐ心置なく飲べしとて又も盃を廻らせしが見れバ見るほど不審な奴也へ一膽冷して呉れんぞと頓て懷中より小判一枚取り出し是いおまり失禮おがゝ草鞋錢ゐもおさりませと清兵衛の前よ差し置きて多くの女中にも纏頭を遣わし故意と紙入の中をザクつかせて見せけれバ清兵衛も心よ驚ろきしがしらぬ顔よて其お志い有難けれどお前もお伊勢樣へ拔參りの身おれバ物入もあることゝへ先々れ返し申すべしと江戸子の氣性でい行ときバかり奢りちらし歸りの途い拇杓を振て斷〳〵歸るがありゲちの事先づ〳〵是いお納をと云へバ次郎吉打笑ひ一兩位い不足と云ふのか夫れおらそふと打明けて云へバ十でも二十でも入用だけ遣わさん金のおる樹い持さおへが我れと俱々心を合せバ失禮おがゝ一生安樂お前も只の鼠じやアあるめへと睨んゞ我が眼い當らぎとも斯ふ打明けて話すうらにやア忌やでも應でも已の味方ざマア一杯飲をなせへと云わをて清兵衛意外よ驚き曾し面を見つめ居しがお前の眼力少

しも違わぢ何にを秘そふ此の私い此の街道の胡魔の蠅ざがお前ど眞逆其樣なと云ふ口押〳〵て次郎吉い猶も聲を低くなし然ば此頃一働き力を合せてやふのそふが何所ぞ大家はあらざるやと問へば清兵衛打點頭是より前三州岡崎在お吉岡村といふ所あり爰ゑ新田の太郎左エ門とれふ大百姓あり我等の仲間日頃より附覗ふと云ども兎角用心嚴しくして中〳〵手出しならず寶の山に入りおゞら空しく瞰めるのみおれど今は四五万両の分限おれば此所でい何ふざと話れを聞て次郎吉の喜び大形おらぢ然らぢ俱に一儲け甘くいつさら山分と云ふを清兵衛聞あへぢ用慎嚴しき家ゆへにやりそゝなつてい一大事我れの手下お文吉とて氣の利たる者あれば之を使へば万一の時の役にも立つべゝれば呼び迎へていい如何にぞといふに次郎吉も承知おゝ去早速渠を呼び來りて先づ初對面の禮も濟み萬事手筈を打合せて三人此所を打立ちゝり是より數日を經て三州岡崎の驛に來り矢矧の橋を打渡ど右へ曲り乾をさゝて三四里行く程に彼の吉岡村に到り百姓太郎左エ門れ家居を見れば田舍といへ眼を慧ろかすばのりの構へにて流石い分限と知られたり三人は彼方此方樣子を見て忍び込む可手筈おぢを極めて开ゞまゝ元の道へ戻り一先づ旅宿を取りて三人い湯に入り夜食を喫ちなどするうち

に時刻も善き頃に移りければ宿へゝ御領主の醫師に知己あるゝ付今宵對面に參ると云ひ捨へ三人打連れだちて吉岡村へ到りし頃ゝ早や九ッ半頃とも覺しく四面閑寂として草木も眠りしかと疑がふ計あれば三人ゝ頓て板塀を乘越藏の前へ行き見れば傍へに竹階子ありしゆへ是れ屈竟と取り外して藏のひさしに掛け次郎吉ゝ一番に登りて藏の窓の筋金二三本を引ぬきて内に入るゝ二人も續ひて忍び入り豫て用意の燧を出して蠟燭を點し二階を下りて見るに千兩箱ゞうづ高く積あげありしを次郎吉ゝ清兵衛と文吉に二ッづゝ碇と背負せ自己ゝ三百兩ばかり取り分けて胴卷にしかと納め手早く元の窓より出でゝ逃げ失せけるに清兵衛文吉の兩人ゝ欲に目暗みて二箱を碇と背負しとゝゆへ元の窓よりゝ出ること能はいかゝゝせんと狼狽うち人聲して提灯のちらつくゆへ猶〳〵焦燥て窓より首を出すといへども身躰ゝ出ず金箱を外さんとすれども細引にてしかと縛りしゆへ急にゝ解けぎ周章るうち人聲ゝ益〳〵劇くあり螺貝を吹立て大鼓を打ち鳴らしければ村中擧つて集ひ來りどや〳〵と土藏の中ゝ押入りて竟に二人を生捕りたり此の有樣ゝ驚ひたる次郎吉ゝ危く其場を逃れて漸やく海道まで逃げのび矢矧の橋を左りに見て池鯉鮒の驛にて一息つき彼の二山村の古歌の如く

玉くしげ二山村のはの〳〵と明もくすへゝ涙路ありけり

次郎吉ゝ此り邊ゝて夜をあかし清兵衛文吉ゝ如何なりしかと思へども今更詮方なく夫より並木を越へて間の宿ゝかゝり此所ゝて朝支度せんものと或る飯屋ゝ入りて酒食を爲す傍へゝ二三人の話しを聞けば昨宵吉岡村の太郎左衛門の家ゝ盜賊三人忍び入り四千三百兩計り盜みしが二人ゝ直ゝ召捕られ一人だけ逃げ延ひたりと云へども詮議が嚴しきゆへ日なふす召捕ゝ爲るべしと云ふを聞てゝ長居もされぬそそくゝゝ此を立出でゝ早くも熱田ゝ至り日も西山ゝ傾ふかしことも へ或る宿屋に就きゝける

第四回　次郎吉宿の娘ゝ懸想する事　并ゝ翌日此宿を立つ事

偖も次郎吉ゝ熱田の宿ゝ泊り不圖眼に附きしゝ此の家の娘か但しゝ下婢ゝ容顏美くしく最と可憐きものから元來好色の次郎吉なれば忽ち心動きて其娘の名を問へば吉と云ふよしゝて家の娘ありとの事なれども酒を飲みながら毫し戯むれしゝ意の外容易く承知せしもへ後刻を約して寢ねたるゝ夜半の頃に至り約束の如く潛み來りしもへ圖らぬ契りを結びし後種々

の物語そるうち娘の云へるやふ某しい此程聖を取る相談極りしゞ甚だ心に濟まぬ聖ゆへ斯く淺はかある今宵の擧動實い貴郎を見込で願ひ奈そるゞ何卒何處方へあり連行賜われと涙とゝもにのさ口説ば流石ょ次郎吉も愛着い絆ゐほゞさを頓には返詞も爲さいりしゞ稍、ありて我い用事ありて大坂に行くものあれど斯くあるうへい何とせん夫しきの事と覺悟のまへの事なをど是非ゐ濟さねばならぬ用事之を濟した後あれば何をへありと連れ退うん日數も長くいかゝふぬことゆへ先づ失れまでい辛抱してといへば娘い打喜こび固く約して袂を分ち夜もヒヲと明けはなれければ次郎吉も起き出でゝ朝飯を調のへ頓て此の家を立出けり

第五回　次郎吉病氣ゐて小家へ休足する事　並に此の家困窮ょ付金を遣ゐす事

それい偖置き次郎吉い此の家を立ちて行程に桑名を過ぎて間の宿ゐ差うゝり昨夜過ごせし酒の爲めょ癪の氣ざしにて頻ゞゐ胸の痛むもへ並木の下ょ休らひけれど兎角痛をの强きょ堪へ兼近邊を見しゞ休ひべき家もあゞれば己を得ず堪へ忍びて五六町彼方ょ行々ば些細なる藁葺の小家あり去ゐへ此ょたどりて暫生せんと門邊を訪ひて某い旅の者にて候が急ょ癪の氣ざしゐて難澁致せば暫しゞ間休息させて給ゐと云へば内より十三四の可愛らしき娘女

が出でい嘸御難儀なるべし穩なき所なれとも此方へ上り休ひ賜へと湯など汲みて差出すゆへ次郎吉い喜こびて上ゐあがり用意の藥を取り出去て之を呑み暫らく俯ぶ去て居たりしゞ微少治まりけをば お蔭ょ快よくなりしと禮なと述べ偖内の樣子を見れば壁い落ち屋根と破れて如何ょも貧しく見へゝるが奥の隅にい莚塀風を建まゞして其中に厠にてもあく何やらんうある樣子故次郎吉と不審氣に娘に向ひ病人にてもありつるかと問へば娘と涙をうゝべ那れい妾の父ゐある ゞ永〳〵の病氣にて明日ょも知れぬ露の命母は四年まへゐ妾と八歳にある弟を殘して身亡り今い妾一人ょく父の看病弟の養育村社人々も不憐ゐりとて厚いお慈みもあをど何を云ふょも永の煩ふひ迎も快よくはあるまゝと醫者も申さるゝゆへ何ゐも外い醫師ょ見く貰ひ去に人參とやらん飲せさらば宜しのらんと云へど是れも大金の入ることへ呑することもあらぎ夫へ村の人々も妾に勸本公に出るゞ善きとて此の間ぢうよりの骨折にて今日い其相談調のひお金を持て來筈ゆへ今日をかぎりの妾の身躰後い八歳の弟ばうりゐて迎も父の看病い覺束なく誠に悲しふ御座りますと涙を放つて泣ければ聞く次郎吉も思ゐ涙ゐ袖を濡らし偖も世間ゐい不幸ゐ人もあるもののな私も不思儀な事にて此家の

厄介になり癖の急に治まりしい此も何かの因縁づく袖すり逢ふも多少の縁お前の孝行よ感じ入れり是いあまり少なけれどホンの御禮の印まで と懐中さぐりく三両の金を取りざし與へければ娘は飛立つばかりお喜こびて存もよらぬお情を見も知らずのお方に受けまして實に御禮の申さふやふも御座りませぬと嬉し涙にくれけるを次郎吉いお主止め何んのそれ志きのお礼に及ぶものゝ早く暖かきもれよても買ふて來て病人に給させよと云へば娘い打喜び襤し若物をかき合せ後を頼とて出行々り跡よ次郎吉は八歳の太郎のそゆへ咄しもなく煙草盆ち出居るところへ年の頃三十あまりの男來りて娘を尋ね出もへ次郎吉い只今買物に行きしといへば彼の男い某しい近郷のものなるが此の村人ゞ相談の上此の家の娘を勧奉公に遣わす相談極りしもへ唯今其金子を持參せりと云へば次郎吉い夫れい〳〵い是間中よりの御深切有難ふ存じます私い此の家の遠縁のものにて疾より難儀の趣きい書狀よて聞及べど種々の商買用にて出ること叶い兼漸々の思ひわて只今是へ參りし所娘も此の寒さにいなゞ單物を着し居る樣子もへ古着にても調へ參るべしと只今外へ出しやれり追付歸り申べし去ながら私參り候うへと娘を賣こも及び申さも段々皆樣の御世話有難くぞんぜます

る是と甚はゞ輕少なゲふ御着なりと召上て給れと二分金を紙よ裏みて差出せば彼の男い押戴き存じも寄らぬことおりと懐中お受々収め然らば身の代金も先方へ返すべきとて彼の男は歸りける大悪人の次郎吉も性い果して善なるう人を助る善行は實に罪過の償なふよたらおん

第六回　貧家の娘買物より歸る事　並お次郎吉留守中の物語の事

偖も貧家の小女い次郎吉お金子を貰ひ天の助けと打喜こび早速海道へ出て人參一両目を調のへ夫よも古着店に到りて病人よ小夜着一つと弟太郎へ布子一枚を買求自已い母の手織布子の質お入りありしを請て米味噌醤油豆腐おゞ買求め歸り來りて次郎吉に厚く禮を述べけれゞ次郎吉も特の外打喜び偖云へるよふ某も急ぎの事もへ緩々い居りゞたけれゞ後々い何はも息たらゞ看病したまひのし先やどい兼て話しのお前ゞ勧奉公のことよ付彼樣の人物參り身の代金を持來りしもへ某い江戸の遠縁のものおるが此の家より親の病氣の由度々申參れども商用の劇しさまゝ今日まで參り兼しゞの某しの參る上い最早や娘を買るにも及ばず是までい樣々の汚心盡し汚禮の申そふ樣もおし輕しうおがふ謝禮として金子二分を與へ

方へ斷りたり此上い種々金子も入るべけれバまづ二十兩だけ進上すべきよりより是よて質地おとを受戻し暮しの道を立て親傍の病氣を治し玉へ夫れにつけてもお前い未だ年葉も行ぬことあれバ能く信切ある人々よ因りて萬事を計らひ玉ひねと耳を撫へて二十兩娘の前へ併らぶれバ娘い夢う惚かと喜ぶこと限りあく如何ある緣にて斯までよお情受くることやらんゆ禮の申樣もぱぐりさせぬ仰にしたゞひ戴き申すと涙ゐくれて押戴くを次郎吉い我も亦た歸りふよりて樣子を見るゆへ何事も信切の人よ賴みて呉々も病人を大切お看護致さをよ急ぎの用ゆ爲ぱ暇申そと起にゐ、れバ小女ゑ別れを惜みて次郎吉の袖にすがりて有難ふと云ふも漸く〳〵口の中言葉もなくて居たりしを次郎吉袖を振り拂ひさらバと云棄て出で行くを娘い蔭の見へぬまで後見送つて伏しをがゑ暫し見とれて居たりけり此方い次郎吉圖らぬ罪亡ぼしをなさたりと私語あゞら道を急ぎ日あら浅大坂よ着しゆれバ大厦の旅店を見立て、此に宿を取り沐浴もすみ酒肴あゞ取寄せて宿女を呼び偖云へるよふ我も暫時此の家に逗留する心得也へ宿の亭主お面會いさし依賴たき儀もあれバ一寸呼んで賜ゐれと云へバ宿女い承知して下に行きしゞ程あく亭主入り來り何傍用に候と問ふゐ次郎吉い先づ一杯と酒を

屬しゐ呼立ゆしたるい別儀よあらず少々折入て願ひたき儀の候ふが私い殊の外酒ゞ好物ゆへ先程傍盃をしの酒のみにてい少々不足也へ尙ゐ二三外ゐ取寄下さるべし且つ何ぞらしき良肴あふバ是れもゐ副下さるべし兎角酒が無くてい話しも面白からずし腦卷より小判を一枚取出し是お て傍賴申べしと遞バ亭主い受取りおがら不圖眼を附くれバ這い如何に二三日以前お達しありし三州岡崎在吉岡村百姓太郎左衛門ゞ盗まれしトの字の極印付さる小判あれバ亭主い心にうなづきて兎さま斯ふさま打見やりしゞ何の心よ浮びしことのありしゐ次郎吉の前お小判をさし置き金い惡くい御座りませぬが少々見分けが付ぎ兼ねバ御取替下されさしと云へバ次郎吉い氣ゞ附うねバ又も腦卷より一枚出して取り替れバ亭主いえたりと心に喜び見れを違わぬトの字の極印いよ〳〵彼奴めゞ吉岡村よて逃たる一人の盗賊と睨んだ目ぱしい五分も違わぬ素知ふぬ顏にて一兩の小判を持ちてお誂へい只今持て參りをすと二階を下り行く亭主の素振り油斷のあらぬ挙動にゞわる

第七回

次郎吉宿の主人と淀辰を尋ぬんと同道をる事並に並木にて主人の手下に逢ふこと

偖も次郎吉い誂へさる酒肴の來しまゝ亭主を呼びて四方八表の話しおどしおゞら暫し獻酬するうちに次郎吉の云へるやふ貴君をれ招き申しさるい別儀ふあらず此の地わて當時世に隱れあり淀屋辰五郎と云へるい直き此の近所なる由我れ其人よ面會して話したき儀ありて今度態〳〵來阪しさる次第なるゞ貴君い其人を御承知あるや若し御承知なるべ御手引願ひさしと存じ勝手あがゝれ招き申したりと云ふよ亭主い心の中に益々不審を抱けども素知ふぬ顔ふく何の御用ゞ知らねども此の地に於て淀辰と云へば名高き者あれど誰も顔見し人もなしとりながら其御用とい何御用にて候と云へば次郎吉い點頭きて差向き是ゝと取留めた用いあけれど高名ある親分もへに一通りお目よ掛りてお話し申し度何卒お手引下さるべしと云ふよ亭主い去れば〳〵よ夫れい容易きおとなきど私い固より知已あらねば开い又さ其筋の人より聞合せべし今宵私と一所ゐれ出なさらば此の土地い博奕流行のとあろもへよ淀辰の家に出入そる人も數多あふん能き手蔓もありぬべしと聞きて次郎吉大よ喜び夫より酒を止めて食事を爲し彼是するうち時刻も善きほどよ移りゝれば兩人打連立ちて宿を出で道の程一里あまりも往し所に大ある川あり岸うつ水音い物凄く船渡しわて向ふへ渡り平山を越へ

て生茂りさる並木の邊を往とまろへ淡闇き樹の小蔭より大脇差を帶たる大の男現われ出たるは次郎吉ハギョッとせしが此方も去るもの來らば斯うと身構へせしを彼の男ハ見向もやらず亭主に向ひ親分何時もの刻限よりハお早ふ御座りますと云ふは亭主ハ打頬笑みイヤ其筈ゞ今夜ハ珍らしき客人ありて此所まで運來りさり何の能き獲者わてもわりまやと問ふに彼の男ハ親分未だ霄のせいゥ一匹も獲ものハ御座へやせん是のふ何ぞ善き獲者をと行きあかゝれば亭主ハ呼止め今夜ハ少し用事もあれば何時もれ所へハ行べのふず夜明あば皆々家へ來りねと云ゑば承知と彼の男ハ何所ともなく失けるを傍より見て居し次郎吉ハ餘りのあとに呆れはて物をも得云わぜ立ち居たり

第八回　亭主次郎吉より物詰りの事　並に吉岡村一件の事

亭主ハ莞爾と打笑ひ次郎吉に向つて云ゑる樣定めしれ前ハ驚ひたろふゞ實ハ私しが淀辰なり家内わて斯云ひ明さんとハ思ひしゞ壁わ耳わる譬わて他人に漏てハ一大事と態々是まで遁來れり斯く打明す上ゥらハお前も含まぜ語られよと云ゑれて次郎吉ハ吃驚しそんあら貴君ゞ淀屋の親分ゥ夫れとハ知らず是までの不調法ハ平にれ免し下されさし私しハ何を隠さん江戸生れの次郎吉とて世間知らぜの小盜賊以來ハ何分宜敷と云へば亭主ハ心の中より左もわりゥと思ひつゝ然らばお前が岡崎在の吉岡村の太郎左工門ゑ忍び入りて三百両を盜を取さる盜賊かトサ云つた計りでハ分るまいゞ今朝お前ゞ渡されし小判ハ偽かより此間お達しわり玄極印付太郎左工門ゞ家へ三人より忍び込み四千三百両を盜みまも二人ハ即ざわ召捕られ四千両ハ取戻せど後一人ハ逃さりて三百餘両紛失せりと嚴き詮議の其一人ハ偽りに貴樣でわろふかなといゑば次郎吉ハ頭を抓き親分の眼力恐れ入をりお察し通り其盜賊ハ此の次郎吉で御座ります併し貴樣ハ道々も人を欺き其上より二人の者をも訛かし二千両づゝの其金を二人ゞ脇中へ縫しつけ自已ハ僅か三百餘両を手輕に胴卷へ包み込み甘く行さら山分とし下手より入つても三百餘両々天秤のかけひきハ天晴頼母敢働らきぞ「去りながら道〳〵の沙汰にて必を痛め何わること〻思ひしが盡せぬ緣ゥ慈おく親分さまに逢ました「シテ我を慕ふて遥〳〵と江戸より來しハ如何わる譯ぞと問われて次郎吉ハ此所ぞと思ひ去をばとよ江戸表の噂わて淀辰といふてハ舌を振つて恐れぬものわし話去を聞し我の心願にハ何卒其人に逢ふて恩ふ仔細を打明したしと思ひ立しゑ別の事よわふぜ近來兎角世上の金融わしき

も、へ何卒世上の金銀を平均して貧富をおふし其上我れも十分よ遣ひたく依て有徳の者の金銀を多く盗まんと思ひしゞ中〳〵江戸ゐて多くの金を取出し難く傳へ聞く大阪は金の聚る・ふころなりと左らば此の地ゐ到りて一働らきせんものと思へども中〳〵に固より土地不案内のことあれば何卒貴君を頼をたく遥〳〵尋ね来りし上は今日より親方と頼べしといふに亭主ハ喜こびて开ハ面白し〳〵我ゞ手下にて先程の様あるもの三四十人をありぬべし去りながら人の浮沈ハ知れぬもの我名の江戸まで通りしば露ほども知らざりしよ开を遥〳〵尋ね來し其方の心底頼母しくもあり辱けあくもあり且つ人ハ相身互ひの事なれば我も江戸に行きて其方の厄介よある事もあふん先づ今宵大阪の手始めよ直に是より能き手引せん當座の金儲けし賜ひといへば次郎吉ハ悦びて此の上共にお頼みゆそと相談頓に調ひければ然らば是より手始せん先づ我いふ通りし給ひかしと何やら懐中より取り出し之を両眼乾度閉ぢ懐中おして見給へと遞送を見るに儘のばかりの切包あれゞ云ふゞまに〳〵懐中しければ淀辰ハ我善と云ふまでハ眼を開きてハおらぬぞと戒め置て手を取りて二足三足歩くと間もなく俄のよ三味線大鼓ハ音ふて賑ひきこと云ふ計りあく女の聲あゞ聞へけるゝ淀辰ハ去ふば眼を開き見よと云ふよ次郎吉ハ眼を開けば道ハ抑も如何よ道ハ如何ゐ爰彼所ゐ提灯を點して唄ひ舞ふこと不夜の城うと疑がふたかりあるが次郎吉ハ其中ゐ彳みて見物すれゞも誰一人咎むる者もあく思ゞぬ愉快を尽すうち淀辰ハ又た眼を塞げといふゆへ閉ればまた二足三足歩行と思ふ間に今度ハ庫の中にて眼を開きしに両側よゝ金箱遥間もあく積累ねあるゆへ次郎吉は呆れ斷成程大阪ハ金の澤山ある所あり一箱取らんとせしゝば不思儀や今まで明きゝところ俄に異の闇と變じ東西明らずありぬれど今までありし金をやわの取ふずゐ歸るべきと箱ゐ手をゝけ持んとせしゞアハヤと云ふ間もあらばこそ底も別ふぬ陷穴へ真逆様ゐ墮ければ淀辰仕たりと思ひあがふ首尾如何ゐと聲かくれば次郎吉ハ只ゞ夢のごとく忙然として物をも云ゞぞありしゞへ淀辰ハ大きに笑ひ是しゝの事よ駭ろくことあしといふに次郎吉ハ膽を消し扨も妙術もあるものかあと只管賛歎したりしが頓て淀辰に云へるよふ何卒其術を覺へゝし御傳授あるやと云ひゝれば淀辰去こそと思ひあがら如何様最ものあとあがふ此の術ハ只ゞ鼻の先あることにて傳授なりがゝあと云ふハ外の事にもあらず一たび女の肌を觸れば立所に命を失なふ故に外に與ふべき守りあり能く信心あさば身を輕く去鼠のご

と〻駈歩くこと自由自在あり必らず肌身を放さるあと一つの守を與へけれバ次郎吉は雀躍しく打喜こび只管禮を述べて受け収むれバ淀辰の云へるよふ大坂は金の築るところといい へ中〳〵盜み骨の折れる所なり我手下の者共二百三百の金を盜ものゝ眞に稀あり氣長に丹精して働き給へ先づ今夜ハ是きりにして話もあとは家へ歸りて休息せんと二人宿所に歸りける

第九回　次郎吉夢中に白髭の老人に逢事　并に淀辰次郎吉に手紙を頼事

又手も次郎吉と宿へ歸り意外に草臥さとば好お酒も呑まぜ其まゝ床を展て臥したるゐ夢ともおく現ともおく白髭の老人現れ鳩の杖ゐ絶て我ハ汝の產神あり汝じ惡逆に增長ゑ其上此度土地を放れて淀辰辰五郎に隨身おすゑと大凶おり近に命を失なふおるべし然れども人を助くることわなゐ依て其德莫大おり早く此の地ゑ退けと高らかに聞もと覺へゑが忽焉として老人は消失せ夢は全く覺絶たり次郎吉と奇異の思を爲ゑ淀辰よも漸々昨夕逢彼の妙術を受々んと思ひ去ところなるゐ老人の御告よハ大凶なり早や此の地を去るべしとハ扨魂念のことゝもなり併ゑ命ゐつての物種大願も成就せぬうちに千秋の思ひも氷の泡と消るハ口惜きことおり如何わせんと双手を拱き考がへ居るところへ淀辰ハ上り来り昨夜はさぞ〳〵御草臥おらんといへゑ次郎吉ハさて〳〵驚き入たる事ゑもおりと頻りゐ考ふる樣子よ淀辰は不審に思へども別に咎めもせず是ハ壁高ゑと制め置きて時に昨夜出し玉ひたる小判と米だ何はゑ持るゝや此の金を散せバ必ゑ事の破れとおり身の一大事とも成りぬべゑ他の金と取換へ參せんといふよ次郎吉喜こびて然らバ二百両あまりあれバ宜敷願むと胴卷より出して遞與バ淀辰ゑ受取て早〳〵取かへ遣はしけるに次郎吉は見て受取今日ハ天氣も喜けれバ彼方此方を見物せんとハふに淀辰ハ然らバ倖ひ道頓堀に我片腕とも頼べき壓屋三右衛門といふものあり是も家ハ旅宿屋おれ共中々の工夫人なゑバ近附におり給ひ我ゝ手紙を遣はすべゝと書簡を遞與バ次郎吉は悅びて支度を爲し早速三右衛門方へ出行ける

第十回　次郎吉壓屋三右衛門に逢ふ事　並よ百姓屋ゐて三百両を盜む事

次郎吉は淀辰の手簡を以て道頓堀の壓屋三右衛門方へ至りけれバ宿女ゑも出來り二階に案内せるまゝ一間に居けゑバ茶煙草盆なゑ持來りて頻りに饗應なすまゝ暫らく待ち受るとよろよ座敷の唐紙をさつと明て上意〳〵と呼立てつゝ二三人バら〳〵と駈々寄る間もなく次

郎吉の兩腕掴んで捻んとするを次郎吉は不意を食つて驚きながらも闕潛りて身を替し一人い座よ敷き両人い襟元掴んで動のさせアワヤ傍へ抛出さんとするを三右衛門い躍り出で四し〳〵と押し止め斯く云ふ某い三右衛門あり此の間より辰親方より委細の咄い聞居たり兼〳〵約束の事なれば今日來り給ふい承知の事あれど辰親方よりの依頼にて貴僚の心を引見よとの事よて斯い失禮せり驚き入つたるお腕前と言葉忙しく云ひ終れば次郎吉始めて疑ひ晴れ偖は何りも承知の事と懐中より手紙を取出し三右衛門に渡せば三右衛門受取りて披き見貴樣の大望面白し先づ一杯飲まて緩々物語りすべきと夫より酒肴を持出し種々の話しするうち三右衛門の云へるよふ今宵直ぐ手始して見玉へ幸ひ我家の後ふ山一ッあり其向ふに百姓家ありて中々金持あれど用心堅固ふて是まで度々盜損せり今宵一ト工夫廻らき給ひと云へば次郎吉悦びて然らば我一人よて働らき申さん併し土地不案内の事あれば貴の中の樣子を見て置きしといへば三右衛門最ありとて是より両人ふて百姓家の近邊に至り彼方此方見廻せば次郎吉點頭きて是にて善しと三右衛門を返さ已れ一人殘りて夫より近邊にて古き大小を求め破れ袴ふと穿て浪人体に出立ち日の暮るゝを待ちて彼の百姓家に到りて申すやう某は長〳〵の煩ひにて浪人の旅慣れ身の上旅店に泊るべき書へもあく甚だ難儀致す大家と見受け參りたり何卒一宿頼み申すと云へば内より年の頃四十ふまりの人出來さり夫は〳〵御難儀ならん一人旅をお留申すい旅店あらぜとも天下の御法度あれどお見受申せばお氣の毒ゆへ一夜ぐらゝはお留申さん去らば洗足あされて此方へお通りあるべしと情けも深き其言葉に次郎吉は一間へ通れば頓て飯酒あど持ち來りしゆへ遠慮なく馳走にあり其儘臥床よ入けるゞ猶も樣子を窺ひんと小用ふ行きし序でよ彼方此方を打見やれば奥の一間ふ四十八九とも覺しき男主人と見へて筐笥の前よ坐して頻りに金を數へてい其筐笥に入る〳〵樣子を確と見定めし次郎吉い知らぬ顔して元の座敷に歸り寢沈まるまで一睡せんと帶を解きて横にあり猶ほも工夫を廻らすうち撞き出す遠寺の鐘を數ふれば早や八ッあれば時刻いよしと起出でゝ樣子如何ふと窺がふふ近邊い鼾の音のみにて外に聞くもれあらざれば密と臺所へ往き見れば田舍の事にて大きなる圍爐裏に自在釣を提げ茶釜を掛て其側に松葉木の枝あどを積置たり次郎吉い圍爐裏の燃へさしの火を鹿駄に移つして上に大き木を載せ手早く元の座敷に歸り空鼾して居るうちよ追〳〵煙りの上るに皆な〳〵眼を覺し夫れ火事

よと云ふ間もなく奥も勝手も大騒とおもしかば次郎吉い此所ぞと思ひ密と起出でゝ見宵に置し小簞笥の引出を明れば百両裏々三個ありしを懐中へ入しまゝ雑沓に紛れて裏口より抜け出し黒塀をヒラリと乗越て裏の畑に出で土を穿て三百両を埋め其上ゐ細き竹を建てゝ印とおし復た塀を乗越へて舊の座敷に歸りたり其早業おみごと恰も鼠の梁上を駈くるが如く自己おがら賊心して寐て居る所へ雷の男來りて御旗人と起すもへ次郎吉い故意と知らぬくれて眼を刮すりつゝ今時分何御用と問ば男い息せ切しく只今盗所より出火せしの幸ひに鎮まりしもへ御安心の爲めお知らせ申と云ふ

次郎吉い左も驚きし躰にて夫れいく嘸ぞかし御騒なされしおらん盗の草臥ゐて早派仕と申さずと飽までとぼけて其場を濟し彼是するうち東の方白みければ早速仕度を調のへて朝飯をと止むるも聞かず此家を立去り門ゐ出でゝ前後を見れども別に人氣なければ彼の印の竹を尋ぬれども更に後方もなし這い不思儀と再三再四尋ぬるも遂に見へざりければ次郎吉い餘りの事に呆れはて暫し忙然として居たり

第十一回　淀長人相書を聞驚く事　并に鼠小僧大坂を出發の事

次郎吉い氣を取り直し二百や三百のはした金にく心ゑ苦むるも馬鹿〳〵し紛失せし金の穿

壁より事發ふべ面倒あり迅く此の場を立去らんと大小を風呂敷に包み三四丁も來たるところあ不圖思もひ夕るゝ夕部の手始ゑ折角働きさる金を人ゑ取らをしあぞゝ踏りて嘲しもあらを好し〳〵今日ゝ芝居にても見物あし日暮ゑならば又ゑ善き分別もあふんかと思ひあきふむる處へ三右衛門の手下の金藏と云へる者向より來り云へるよふ三右衛門親方の云ふにゝ手始の不案内の事あれゞ仕損じてゝ一大事也へ我に彼の百姓家の近所に忍び樣子を窺ダひ見よとの事ゆへ宵より窺ひ居たりしゑ八ッ半とも覺しき頃塀を乘越しものあ如何なるものと見居さりしに其人畑の土を穿て何ゝ埋し樣子也へ是偖ゐ次郎吉ぞのあらんと思ひしが又た塀を乘越て内に入りしを不審と思ひ畑へ往き掘りへして見れゞ金包三百両ありけれゞ持歸りて三右衛門殿へ手渡あし其趣きを咄したれば親方も再ひ内ゑ乘り越へしゝ不審あれ早く次郎吉を連れ歸れよとの事也へ迎へゑ參りさりと云ふに次郎吉ゝ始めて安堵なし手始の金を人ゑ取られしあと、咄しもならねゞ今日ゝ芝居よても見物し日の暮ゑあば又た一工夫せんものと種〳〵思配せしダ能く迎ひに來て呉れしと此れより連れ立ちて三右衛門方ゑ歸り昨夜の趣向を咄せしゝゞ三右衛門ゝ苦笑ひして火業あていゝあぶあき技あり此土地ゝ

至て狹き所ゆへ此の後ゝ必ちを火業ゝ謹ひべしと戒めて彼の三百両を返して偖云へるよふ手始も首尾よく成就せしゆへ是の金にて仲間入りをせをば成ま併し何事も淀辰ゑ親まんと是よりゝ三右衛門同道あて淀辰方ゑ歸り昨夜の咄しを成しけれゞ淀辰も聞て三百両を盜しゝ手柄なれども附火の事ゝ偖〳〵殘念の事なりと話のうちに次郎吉が仲間入りの事を頼れしかゞ手下の者共追〳〵と聚り來るを見るゑ皆な外套などを着し中にゝ袴を穿くもあり中〳〵盜賊などすべき人体の者ゝ一人も見へをゝ次郎吉ゝ一人〳〵に對面して近附を爲うち後れて半次郎といふもの來り劇しく淀辰ゑ云へるよふ不審ある人相書こそ得され此の人相書ゝ一昨夜の夕方に筆立山の麓ある百姓家へ涙人者入來りて一宿を乞ふゆへ餘り不愍也へ内に留めしに其夜臺所より火燃出し大騒動せしが幸ひゑ家内打よりて消止めしところ彼の涙人ゝ其朝夕飯もせを立出しダ亭主ゝ程過ぎて金子の出入にて算筒を明しに偖ゐに昨夜入れ置し三百両の金子紛失せしゝ全く涙人の仕業と夫より領主に訴へ出しに何國の者とも知ざれゞ人相書を以て口〳〵へ張出したり我も一枚貰ひ來しが次郎吉ぞのにてはなきやと云ふゑ淀辰も驚ろきしダ次郎吉ゑ向ひ知らぬ事とゝ云ひながら偖〳〵殘念なる事を爲したり

此の人相書あてい迚も此の地に徘徊い成まじ暫らく他國に行きて殘熱をさましさるが善かふんといふわ次郎吉も殘念にい思へども暫らく他國に逃れて又も御危介に來るべしと恍々として居ければ淀辰い左まで落膽するよも及ばし復の逢ふ瀬もある事とおふん仲間金の事い我呑込んざり一刻も早く逃れ給へと せき立られ次郎吉い泣〳〵も原く袖を述べ三百両を懷中なして大坂をぞ立ち去りけり

第十二回　次郎吉水口城下へ泊る事　並に宿の亭主を騙る事

訛表次郎吉い大坂を立退ひく行〳〵倩〳〵思ふよふ先頃夢に老人現れ淀辰に隨がひていい大凶ありと云ひしい今に至りて思ひ當れり是より江戸に歸りて町人い勿論大名旗本へ恐ひ入りて金銀を盗み取り運を開うんと淀川を舶にて越へ伏見に着東海道を江戸へ志ざし水口驛に宿を取り何の面白き事いなきやと思ひなゞふ先づ按摩を呼びて疲の勞れを休め種々話しの中に按摩の云へる樣世の中に慾なき人い多れども此の家の亭主程慾深き人い多し私共いよふ成ものゝ療治代を一人前に付十二文づゝ例るほどにく金儲けの話しにても致さば何にても手を出す人あると聞て次郎吉い心に點頭き何う善き正夫とい考ふるうち按摩も聞い

如て飯を持ち來りしもへ食し居るところへ亭主ゞ出來りて賊よふ飯未なりと云へば次郎吉い懷中を探りて何程かを出し是い餘り少々あれも茶代ありと亭主の前に差置けば亭主い〳〵と喜こび偖てお客樣にい二三日も御逗留の趣あるゞ何の御商法にて候ふかと問れて次郎吉い少し因りしが知らぬ顏にてイヤ差したる商賣にも之れ無く些仕込みを致す稽りありといへば亭主いた樣に候ふか緩々御逗留の程願ひたし又さ喜き金儲々もあらば御相伴願ひ申すと笑ひつゝ出で行きさり次郎吉い何思ひけん其儘宿わ斷いりて通りわ出で鉄鎚樣あるものを一本求め來り其夜い何事もなく打臥せしが明る朝い早くより起出でゝ何う扉風の中より憂〳〵と叩きしが夕景に至りて漸く止めて宿女と呼び小粒金五ッ渡して之を二朱銀に取り換へ呉れよと云ふよ宿女い承知して取換へ來りしもへ次郎吉い只管禮を述べて受取りしゞ其翌日も亦さ右の如くして夕方にい金を換へ翌々日も亦さ其如あれば亭主い不審わ思ひ偖はそ彼的偽金造りおりそれとい知らず是れまで取換へ遣りしい殘念あり夫れわして也其金を驗べみんと出し見れと更よ變りし所なければ又さ不審起りしかど兎に角く毎日毫〻求めい夕方わ取り換へるい何よりの証據跡さへく褒美の金に有り附らんらいや〳〵夫れ

ふてゝ事少さし寧そ威あて那の傳習を學バんか夫れゝ増したる分別なしと胸ゝ問ひ胸よ答へて早速二階に上り來り内々れ聞申し度事こそあれ只今御取換の金ゝ善き金よゝ相違なゝれど全体あれゝ如何ある金よて候ふやと問へバ次郎吉ゝ情こそと思ふ心を色にも見せず道ゝ不審あるお問ひゝあ彼をゝ矢張普通の小粒ありと云ふゝ亭主ゝカラ〳〵と打笑ひ成程普通の小粒の樣にゝ見へまするが中々手ぎゝに出來たものにて候ふ彼樣なる事を見附けゝ上へゝ何れにしても訴ふるか規則なれゞ左樣してゝ花も實もあし眩ゝも膝ともゞん合と云ふことわり御相談次第にて如何にも取計ひ申さんと乙にゝらんゞ亭主の言葉に元より仕組んだ仕事あれバ次郎吉ゝ頭を抓れ斯く現われさる上ゝ致し方なし併し如何致せバ眩へゞに辭さるゝやと云へバ亭主ゝ心の中に仕すましたりと喜ひあゞらイヤ左樣に打解々たゝ話しふてゝ却つて赤面の至りあるゞ彼樣な甘き商法を一人にて占ひるも餘りわこぎゝ某ふも少し相伴させて宜敷バ暫らく當地に止まりて仕事致度へと云へバ次郎吉ゝ成程大金を儲度ゝあれど資本に差支へ夫も へ彼樣ある小刀細工を致せりと左も誠しやゝの言葉に慾よ目のなき亭主ゝ益〳〵乗り氣ふなり資本あれば如何ようとも爲すべし先何程位入用あるやと云へバ次郎吉ゝ暫らく考へ充分の事を爲さバ千両程入用あるべけれと差向器械と造るに二百両あれバ後ゝ追〳〵まても事足るべし兎に角千両の資本をかけなバ凡ろ二千両の儲ゝあるべしと云ふよ亭主ゝ去らバ其二百両の金ゝ某し出すべきが器械ゝ何方よて求ふるゝやと問バ大坂にて取り纏めんと云ふにゞ然らば二人にて明日にも出立せんと云ふよ次郎吉ゝイヤ兩人參るまでもあし兎角彼樣あることゝ露れ易れものゆへ成べく秘密を肝要と致せバ我一人よて大坂に參り大坂の懇意なるものに頼みて器械を取り集め开ゝ一緒よして此方へ差し送れバ其時使れ者よ二百両の金を渡し給へと誠しやのある辯舌にあざむかるゝとい露知らぬ亭主ゝ喜び勇みつゝ早速承知あしければ次郎吉仕たりと打喜び堅く約して明る朝早々宿を立出でけり是より次郎吉ゝ大坂に行バ舞わりにて同宿の或る旅宿に宿を取り善き加減に木切などを取り集めて藁包とあし五六日を過て其宿の馬奴を語らひ荷物を馬の脊に荷せて之れに手紙を副へ約束せし通り二百両の銀子を此の者ゝ渡し呉れよと云ひ送り自已は直き近所に待ち受けゝるに亭主ゝ荷物を受取り此の手紙を見しゝ右の次第ゆへ毫も疑がわぬ二百両の銀子を渡しけれバ馬奴はとと受取りて頓て立歸り次郎吉に渡しければ次

郎吉い幾何らの禮を爲し甘〳〵二百両の金を欺むき取りて何處ともなく失に々り

第十三回　次郎吉岡崎宿より歸り馬に乘吉岡村一件を聞く事　並に横瀬村危難の事

不題も次郎吉い旅宿の亭主を欺ひき二百両の大金を奪ひて心地よしとそれま、道を急きて數日を經て岡崎に着せしゞ餘りに足の弱りしま、歸り馬に乘り馬士の種々の話するうち馬士の云へる樣世間にい不幸あるものもあるものなを先達ての事ありしゞ是より四五里離れたる吉岡村の大百姓太郎左衛門といへる家へ盜賊が三人潜び入り危く四〳〵二百両奪るゝ所ありしが幸ひよ二人丈け其場にて捕まり一

人を取り逃したまでもへ三百両よて贈みしが其捕まりし両人は直き此の近邊の者にて中にも一人は子も女房もあるものなれ共石の別よて亭主いとふ〳〵首を刎ふれしゆへ撮あく子と女房は引取られしが此の牛右衛門い常年七十九歳よて自分丈けの暮しも覺束なき程ゆへ女房も却て此の世話うら我子の世話まで女の手一ッよ引受け〳〵賊に可愛想ある有樣ゆへ盜賊の女房といへ罪あれ人の事なれば村中よて目を掛くれど何と云ふにも先に見止のなき事ゆへそふ〳〵い積りず今でい人に屈まを又と洗ひ針などして漸く其日を送る仕儀何と不幸な話しで

い御座りませんかと話しを聞て次郎吉い胸ゐギヤッヽ心の中に南無阿彌陀佛を唱へつゝ夫は可愛想なる咄しゐりシテ其牛右衛門とやらの在所い何と云ふ所ゐりやと問へば是をより半町ばかり離れさる横瀬村と云ふ所ろなりと云ふに聞て盗賊とい云へ固より義氣のある次郎吉なれバ暫しも猶豫いならぬ早速馬より下りて其足ゐて横瀬村に至り牛右衛門を尋ねて彼の女房に逢ひ其容子を見るに身ゐは膝限ある縞縞を繻ふて細帯をしめしまゝ髪と鬢れて山姥かと怪まるバのり ゐり次郎吉い女房ゐ向ひ云へる様 某 も毎〳〵此の道中筋を往来爲す無脚ゐてお前の連合とい常に心安くせしものゐるが今度聞けはとんだお歎の由嘸〳〵お困ゐおらん是れいはんの心バのりと懐中より何程かの金子を出して與へけれバ女房い嬉し涙を流して喜こびしゞの折柄此の村の名主右太夫といふもの通はり掛りゐれば女房い名主を呼びて丁度善き處ゐりし此のお方い亡夫の知已にて態〳〵お尋下され斯る大金を下されさり善きゐゐ御禮を申上げ下されといふゐ流石い名主ざけ不審ゐ的と氣取りながらも色には少しも現ゐさず御信切ゐ幾くも御尋下されさり此處い餘りよ穢くるしゝれバ手前方へゐ出下され刻限の事なをバ何いゐくとも蜜飯でも上りておぱり下されと歸るといふを無理に

引止め是非に〳〵と連れ行きさり名主い酒肴ゐど調のへて善き程よ饗ち置き早速此の事を村内の隱遁ゐ報じけれバ隱遁と直ちよ牛右衛門方に來りて戸の際より窺ごふよ道以抑も如何ゐ兼て人相書の廻りさる吉岡村の盗賊ゐ相違なければ這と善き獲者と早速手下共を呼び集め最と嚴重ゐ手配しく次郎吉の油斷を見濟し四人ばうり一度に踏込み上意なりと掛けつゝ右左より打てゐゝをバ流石の次郎吉も仰天したが何を小癪ゐと云ふより早く右より來る二人を目掛け煙草盆を擲げ附くれバ忽ち上る灰のぐふ眼くらみて狼めくを見向もやらず左より進む二人を一人は首筋掴んでズダンドウ二間も先へ投げ出し一人は足よて蹴飛して开がまに表よ飛び出せバ待ち搆へたる手下け者共ものをも云はせ五六人一度にドッと打て掛れバ這は手剛ち的原と右に流し左よ避々彼方に潜り此方に通る其早業偷んものあく這と仕損じたりと捕方い近傍よ眼配れども一寸先は眞の闇取り逃したるは殘念と歯ぎしりゐして尋ねれども絶へて行衛は知れざりけり

鼠小僧白浪雙紙上巻をわり

鼠小僧白浪雙紙下卷

第十四回　次郎吉辻堂にて盜賊の金分配を見て跡を附ける事

次郎吉ハ危き難を免れて漸く二三里走しゞ拾ひ出す鐘を數ふれバ早や八ッなるも〳〵辻堂にてもあらざるの夜明てゐると一睡せんと邊りに眼をバ配り見るバ森の遠にて霧々と燈の光りの見へけれバ光りを當てに溪澤のきらひなく又も四五丁歩みけれバ座ハ人家にハあらずして辻堂なるが中に何やゝ話し聲のするゆ這ハ不思儀と立寄りて戸の透間より内を窺がへバ月代を三四寸生し色黑〻〻とせし大の男二人あり燈火と見へしハ提灯ゑて云ゑでも知れゑ盜賊ゆへ次郎吉ハ猶も耳欹ざてゝ聞くとハ如ちぞ両人ハ取りし金を前ゑ列べ一人の男云へるゑゝ今夜の旅人ハ中々手強き的あり是れ此の通りと腕をまくれバ二の腕の邊ゆ少ゑバのり刮り疵あり一人ハ之を見てイヤ中々の代物ざつた併し九平次のハ大しゑとハゆへゞ己が彼奴の胴腹を忍ぐつた時アッと云ひさま持た刀を落すとゆみゑ避けながゝも此の通りの疵を受けゑと足をまくるバ膝頭の邊に餘ゆどの疵あれバ一人ハ又た成程藤次のハ已よりの重ゞゑゝふざと両人白布を取り出して疵口を手當ゆし取たる金を等分に別て是より両人ハ條

行者の姿と變じ提灯吹消して何所ともあく出行きける次郎吉後見送つて心の中憎き奴原の振舞かな後追かけて一泡ふかせんと思へども待て暫し先づ二人此方へ一人引を取る氣遣へあけをとも君子へ危きゐ近よらぬの諭何ぞ善き工夫もと胸に問ひ胸に答へて次郎吉へ二人が後を見へ隱れよ暮ひ行くとと白浪の二人へ是より海道ゐ出で泊りつけの宿を起ちッィ引止められて遲くゐりしと云ひつゝ内に這り行くにぞ次郎吉へ見すまして少ち間を置き我等へ田舍のものゐるが遲くゐりて山路にふみ迷ひ漸〳〵海道に出ちもの何んな所ゐても一夜の宿を貸し給へと宿の戸叩けば宿女へ夫れは嘸かし御難儀ならんが最早や火を消し候得ば食物と云へ出來申さずゐ休のみにて宜數ばゐ泊りゐされと云ひけるゐぞ次郎吉へ夫れへ信切のたとけなし固より寐るのみにて差支へゐしと是より宿屋に泊り込み頻りに工夫を凝せしが彼的等も固より商賣人甘き手にては事成まじ好し〳〵斯ふしてやふんずと夜明け前を待居たり

第十五回

次郎吉宿の主人を欺き盜賊の金を奪ふこと
並ゐ大井川を金づくにて渡る事

暫らくして次郎吉へ時の鐘を數ふれば早や明六ッゐりしゆへ時分へよしと遽へ起き遽りに手をば打鳴らせば下女へ吃驚起出でゝ次郎吉の座敷ゐのけ來り何御用と尋ねれば亭主であければ分らぬと云ふゐ下女と其趣きを亭主ゐ語れば何事と亭主も吃驚何事と早速次郎吉の座敷ゐ至れば次郎吉は聲を震ひして亭主に向ひ某は京都本願寺の飛脚ゐるが江戸より都に登ゐ急ぎ用の金子二百兩を今零時微睡し間ゐ盜をゐり恐くは此の宿のうちの客人と察すれど驗ぶる間へ一人も外ゐ出さぬ樣願ひたし且つ代官所へ訴たへ出驗ぶべきが當然なれど斯く致してへ手數ものゝり一つにへ此の宿より罪人を出すのも氣の毒ゆへ成べく穏便に濟したゝれば亭主の了簡にて今夜の客を殘らぬ改め呉ゐ若し兎や斯ふ云ふものあらば據ろなく其時へ代官所の厄介ゐ爲るべけれどかやうの事はお前の後〳〵の障りにも成ることゆへ精々心配致されゐと誠しやうに說きつくれば亭主へ吃驚开へ怪しゐふぬ事こそ出來ゐきシテ金にへ固と印なきものなれば何の証據にても埒坐候ふにやと問へば次郎吉と撰て辻堂ゐて見覺置し入物へ紫縮紗に白く下り藤の絞を染抜きたる服紗にて金は小判ゐて百兩づゝ二包ゐりと云へば亭主へ點頭て左樣に惜な証據ゐあらば直ゐも分り申すべし暫らくれ

待なされよと云ひつゝ起て出行しが忽ち四五人の口利を集め来て片端から一室〳〵よ其譯を話して檢査見しが盗賊の痕跡には亭主と手代両人來りて云へる樣下に泊りし本願寺のお飛脚が用ひ金子を盗れしとの事ゆへ種々探索は盡したれど外のふ這入し樣子も見へぜ去りとて其儘おも濟ざれゞ代官所へ訴ふるとあろあるとも斯くして〻事重くもなり固より内さへすれゞ穏便よ濟ことゆへは迷惑ながらお荷物を拜見します去りながら貴君方をお疑ひ申す次第おゝ之れ無く彼方を檢め此方を檢めぬと申す次第おも參ふねゞ悪うらず御承知をと云へば二人と驚れし面附にて夫をゝ何しろ氣の毒の事ッテ其金は如何程と問ば小判で二百両と云われて胸にギックリ當れど仕組ゞ仕事と知らされゞ眞逆と思ひ云へるよふ成程二百兩と云へば大金おれど其位の金ゝ世間おゝ持歩くものゝ幾何もあり何を秘そふ此の巳邊も兩人にて丁度二百兩の金ゝ持合すれどシテ何ぞ証據ものにてもあるやと云へゞ亭主は黙頭きて夫れゝは最の侍尋手前方にゝ慥かおる証據が侍坐ますッタガ金子さへあれゞ何もお慰きおゝ及びませぬと云はれて二人ゝ眼を剣出し乙おあとを云まるゝゝ此の二人ゝ取たといふのか証據あらゞ証據を見んと威猛けだのによりて奇れゞ亭主ゝ呵々と打笑ひ左までお怒うにゝ及びませぬ其証據といふゝ紫縮緬に白く下り藤の紋附たる和合なりと云はれて二人ゝ面色變り忽ち言葉の差迫るを亭主ゝ見て取り失禮おがら侍荷物をと小布呂敷を引解タゞ中にゝ火附道具或ゝ鑿小刀など似合しのらぬものゝみあれゞ亭主ゝいよ〳〵不審お奴と思へど此の中よは金子おどおけをゞ一人の男を裸躰にして檢べしに手拭お包たる百兩包一つ落しもへ先づ此方へ取退け置今一人を檢べしよ是れは百兩包の後領鼻輝の間より轉ゞり出で和合樣のものは絶て見へざれゞ亭主は少し困りしが不圖氣づきて床の下を檢さめ見れゞ何時の間に隠せしゝう紫縮緬お白く下り藤の紋附たる和合出でしもへ亭主は驚き偖こそお前達が盗人であつたのそをゝは知らず是まで度々宿せしは我おがら愚おゝしと云へば二人は面見合せ頻りに考へ居たりしを盗賊の分りしと聞つけ下よりゝ八九人の若者共ドヤ〳〵と上り來り夫れ逃すおと逐取り卷けゞ亭主は其金を持て次郎吉の坐敷に來り偖〳〵とんだおとを致したとれ尋の二百両とは紋附のは和合は慥かに泊り客の仕業にて只今取りうへ參りました此の上ゝ如何樣おさるとも お客樣の御存分と其金前お差し出せゞ次郎吉ゝ仕てやるたとと思ひながらも扨〳〵憎ひ奴原おり併し藤さにも云ふ通り其罪ゝ悪むひとも

其人い惡むべうらぞと云へば金さへ出れば荒立つるにも及ぶまじ兎に角此の金ゞ一刻を爭ふ用金故後〳〵のことい御亭主に任すに依り成べく穏便ゑ取計ひ玉へ我と最早出立すべしやれ〳〵御厄介にありしぞと朝飯も食せぞ打立けり治郎吉い是より道を急ぎ矢萩の橋まで至りゆれば江戸あゝ社寺方の大檢使と云ふ共廻りゑて下ゑ〳〵と來りけるに次郎吉い何事ぞと近邊の人に問ゆれば昨夜塔の山海道筋の谷合にて旅人一人切殺されしが止めを刺ぞに置しうば今朝まで息のびて見附し人に咄すにい狩人ふしき者二人に切られ紫縮緬に白く下り藤の紋附たる服紗に包をさし二百兩の金子を奪われたりと云ひし由其檢使様に御坐りますと聞ひて次郎吉い身の毛よゞち早速宿駕籠を傾ひ通し駕籠にてぶぎしゞ折節雨降あげくにく大井川ゑ止ゞしよし據ころあく宿に泊りしゞ何とな氣の落附のぬまゝ又も宿を出て大井川の洪水を見物せんと畔り近く往ゑ見れば實ゑ恐ろしき滿水ゑて千丈の堤も崩すべき勢あり次郎吉い彼方此方徘徊するうち川下を見れば川越の雲助ども眞裸躰ゑて十四五人寄集り集ひ何やらして居る様子ゑ次郎吉い傍に寄りて見るに古席を敷て小博奕を打て居るもへ煙草を吹しあがら斷し見て居しに一人の雲助ゑ次郎吉に向ひお待なさつても止まつて

居るから渡さませんと云ふに次郎吉いイヤ夫れゑ已も知つて居るが此い川下ゆへ骨を折さら渡せぬともあるめへと云へば雲助い夫れい極内々だが的次第で隨分骨を折めへものでも座へやせんと親指と人差指と丸くして見せければ次郎吉ゑ打獣頭夫ゑら極内で遣て呉れと小判一枚投げ出せば雲助共い打喜び此様善く辯つた旦那いねへ兄弟好ゑか遣附けよふと早々連臺を持ち來りて誘乘り玉へと差卸せば次郎吉ゑ喜こびて之ゑ乘ると均しく四人にて川中へ舁入れけるに水勢い凄しく涙を飜ゲへし流れの音滔々として恐ろしゑんと云ふ計りあし流石に慣し川越共も流され〳〵横切りて漸〳〵向れ岸に着ば次郎吉い難りし心地して又も小判を投出して骨折賃と與ふれば人足共い打喜こび追從たら〳〵禮を述べ再び川に入りゑける次郎吉い滯ふりゑく大井川を打越へて先づ安心と江戸をさし猶も急ぎて走り行く後に川越の人足共い種々評しゑへる中ゑ一人の男云へるよふ何程急ぎの用なりとて二兩出して川越すい不審な奴に違ひなし特に目方を引き見るゑ二百兩い慥の代者兎に角親方に咄したなら甘ひ分口が貰へよふと云へば皆〳〵同意もへ直さま一人親方の大助方へ走往きぬ

第十六回　川越大助次郎吉を付窺事

幷に次郎吉旅店あて大丸の飛脚の金を奪ふ事

又手も此の大助とんふい當所の破落戸にて降摩の蠅の親方あり川越の子分の知らせよ急ぎ川端に來り直に川を渡りて次郎吉の後を逐かゞ漸やく次郎吉の泊りし宿に泊りて隙もなくば奪わんと覗ひゐるに次郎吉も固より油斷せぬ怪敵ものと用心して金い殘らぬ胴巻よ納め腹に晩と括つけて宵の中よゞ何か能事のあれかしと眼を附け居しに不圖江戸大丸店と書し網袋を両人の飛脚の持來しを見たれば這い好況獲物と胸あたゝみて夜の更くるを持つゞと い露知らぬ川越大助拔足さし足次郎吉の坐敷の前よ來て見れゞ次郎吉い何時も寢入し樣子のなきに困じ果て居るところに次郎吉は何思ひゐん密と坐敷を忍び出でゝ何れへか行もへ あ小便にても行去とうと大助は蔭に隱れて跡見送れば道も开も如何に道と如何よ向ある坐敷に忍び入り網のかゝりし包を我坐敷に持來り手早く網を解き澁紙を明て金らしき包を懷中に入れ又手早く元れ如くして蹲に出行く故大助は心の中に大に驚き此的中〳〵の手ぎゞあり甘く誂り呉れんものと歸るを待ちて聲をかけ今宵の首尾い甘く往々り我も宵より窺ひしがお前よ先を越さをた爲め切角の思ひも水の泡一体お前い何處の者ぞ此土地にて大聡と

いへバ光梶仲間にて小口も利己だのに他國のお前に先ダけられ指をくゝへて引込では子分の者に面目なへとい云ものゝお前の盗みし其金を取ろふといゝても始まらぬ何んと物い相談だダ己にも半分此の顔を立させて呉れる氣はあるまひかと云へば次郎吉と心の中憎き奴とゝ思へども兎に角爰い旅店ゆへ彼是云いゝ食ひ込まん此奴を外へをひき出さ然る後の事わせバ又た好ゝ手向もあらんこのと胸に思案を定めつゝ大助に向つて云へるよふ私も年久しく此の海道を往來する飛脚あるダ下り上りよいお前の名前も聞しゆへ何時の一度は一杯取り接しさしと思ひし所此處で逢ふとは幸ひなり又た今の仕事も殘らぬの高が僅ク二百両皆あお前に上たとはろダ高ダ知れたる事ゆへ上るも上あへもなへか兎に角此處と宿屋ゆへ話しもあらねバ夜明まで未だ間いあれど早立去て道にてもゝ〳〵話さんと云へバ大助も面白しと互ひゝ支度を調へて急此の家を出ゝけるに次郎吉は門口を出るとたゞ小石三ッ四ッを知れぬよふお懐中ゝ入れ素知らぬ顔にく四五丁バかり行きしゝ大助い次郎吉に向ひ夫れなら今の割前をと手を差し出せバ次郎吉い夫れは固より進上すれど此に一つ相談とゞふに私も二百三百の端金い何時あても働くべしお前い土地のお人もへ金持の家々い承知あるべしお前が若も金持の家へ案内せバ今の二百両位い慰斗を付て進上せんと云へバ大助い點頭きて此の海道にてい今ま六七町も往バ右の方に笹藪のある黒板塀の貶とせし家あり用心の堅固なるもへ是まで手を出しさることいなけをぞも確かに千や二千の金のあきことい有し此家ゝて能くバ案内せんと云ふゝ次郎吉い然らバ案内に郷申すと是より両人い此の家の前に來り次郎吉の云へるゝふ然らバ約束の二百両を渡もべしと懐中ゝ胴卷のまゝ取り出して大助ゝ與へけれバ大助い之いうさとけおしと喜こびて懐ゝ収んとするうち次郎吉い早くも此の家の塀を乗り越へ何處ともなく失ゝける大助い何か氣ゝ癖まざれバ一旦収めたる胴卷を又出して改め見るに金と思ひしい金にあらず石ゝろ三ッ四ッ轉〳〵と出けれバ道い甘〳〵謀られたりテモ早業ある男ぞと暫し呆れて居たりしが夫れゝしても彼奴い土地あをぬものなれバ中に這入りて猥狼あらん出來ちバ捕へて呉れんと血眼になりて待ち搏へされど何時まで經ちても出來らず斯するうちゝ東い白みあけの烏いアホーと叫ぶ

第十七回

次郎吉小田原驛ゝ泊り相客の娘と逃る事

並ゝ両人品川に家を持つ事

次郎吉甘〳〵大助を欺きく塀を乗り越へ裏木戸の錠をねじきりて息を限りに走りしが程なく夜明々に爲りしかば夫れより宿駕籠に乗りて一飛ゐ小田原まで飛し少し日い高けれど此處に宿を取り昨夜の勞れを休ませんと按摩なぞ呼びて揉せけるゑ其隣り坐敷よて頻りゐ少女の哀しき泣聲の聞へけるゐぞ次郎吉い按摩に向ひ何故と問へば按摩い云へるにい私も又聞にて能くい知らねど彼れい熱田のものにて今度年貢の金に差支へて娘を江戸の品川へ身賣さする由彼れに居るい其親父と娘ありと聞て次郎吉い忽ち愛憐の情を動かし何とかして其娘を救ゐんと思ふうち其の娘小用ふ行くゐ次郎吉い好き折と直さま跡より附き行きて樣子を見れば中〳〵に器量すぐれて居れゞ何處う見た樣ゐ娘と出來るを待ち搆へて見るべば道い如何に兼て上りゞけに熱田の宿にて契り置きしゐ吉と云へる娘ゆへ互に驚き積話をしたる後次郎吉い娘ゑ向ひ私い丁度お前の隣坐敷に泊て居るゞ今お前の身賣の事を聞て泣く居た袖そゞ合ふも他生の緣といふともあるべば何とのして上さくと思へども何をいふにも親父さまゞ些と強情の樣ゑ聞ゆれば一寸の事にはゆくまいゞ〳〵ト少し考へ〳〵時にお前の年は幾何だつけゐと問へれば娘は顏を赤めめ暫し返事もあかりしゞ稍あ〳〵てハイ私の年は十八ゐ

御坐りゐすと云へば次郎吉は顏をのゞき込み容貌と云ひ心立と云ひ何處と云つて惡ひ所いない年端も行かぬ此樣良ひ兒を幾何金ゑ困れたとて女郎に賣ふとは胴慾おお親爺さんシテ幾何金のあれば身を賣さと濟むのゞへと問ば娘い愧りし氣に父の申すゑは二十五両ゞと云ひますゞ私しや悲ふ御坐りまさとロッとばかりゐ次郎吉の袖ゑすゞりて泣き沈めば次郎吉と娘の脊を撫で御しホンにマア可愛想ゐ併し己れゞ聞くのらにやア泥水に沈めるゑふあといしねへシタガ此處に何時までも居て親父さんに知れると惡ひ此から歸つて親父さんへ酒でもすゝめ機嫌能く醉わせて置て今夜已の所へ一寸來ゐせへ其時委しく話さんと二人左右ゑ別をけり娘は元の坐敷ゑ歸り荐りゑ親父ゑ酒をすゝめグッスリ醉わせて开がまゝに床に就きしゞ其中ゑ親父い忽ち高鼾前後も知らぬ寐入りを見すましたる小女は密と起出で震へる足を踏しめつゝ合の唐紙を押開けて次郎吉の寢間へ忍び寄ば待ちまうけたる次郎吉は何とも云ゐぬ夜着引まくり娘の手を取り引入たり娘は口ゑ手を當て耻かし想に次郎吉の顏を見つめて居さりしゞ莞爾笑つて我顏を袖に掩ひし其風情い雨ゑ惱める海棠の嵐を厭ふ櫻花美くしなんと云ふばうりゐし次郎吉と娘に向ひ云へるゑふ斯ゐる上いお前とてよもや

私が云ふまとを厭とゝいひさしまいがな實は私は江戸の者ざゞ未ざ極りし妻もなく夫れゆへ江戸へ歸りしとて樂しひまともあい身の上お前が私の女房ゑなゝバお親父さんへ願んざ上媒人立て婚禮をしさへすりャア何も譯けはあいことだゞ何を云ふにもお親父さんが彼いふ氣ではヲイそれと直ぐに聞ひて呉れあいのゝ目の前ゑ知れさことゝゝつた所ゞの仕方があいのら事のまとお前も品川へ行ゑ積りで己と一所に逃あいか二十五両の金さへ遣りやア親爺も其樣に怒りもしめへと云へバ娘も度胸をすへしゝ何で私が否應申しませう此間もお前に云つゑ通り仮令女郎ゑあらずとも家に居られぬ此の身体何ふとも お前の思ひ次第と投かけられて次郎吉ハお前ゞ左樣いふ心なら親父の起ぬ其中に片時も早く支度せんと懷より二十五両の金を出し娘ゑ與へ之れに手紙を添へて親父の枕元に置せ未だ宵の事あるバ宿屋には宿に用事ありとて娘を先へ出し置き少し間を置て次郎吉も用事ありとく出でしゝ二人手を取り失にける其手紙に曰く

御娘子事苦界へ御沈め被成候より私御貰ひ申候金子廿五両は結納と思召し可被下候年季だけ經ひまでハお互ひに知らぬ振に致ゟ可申候左樣御承知可被下候御娘子事は必ゟ御案事被成間敷候以上

月　日

御親父樣へ

江戸

是より二人は駕籠を雇ひて夜通し戸塚驛ゟで走り其翌日又駕籠にて早く品川まで來り漸く安堵せしが偖身上を持たねバあらぬゆへ次郎吉が躁て懇意にせし取あげ婆々のおやすと云へるを頼みて天王山ゟ下へ店を借ることに取極めしが店受人のなきので婆々が懇意のせげんの善八あるものゝ丁度其店の隣家へ之を頼みて店受にせんものと萬事此處に極りしに娘ハ其話を聞て驚き去躰にて其善八といふ者ハ女郎の賣買の世話なす人にやと問へバ懇々ハ左ありといふハ夫れなら其人ハ今度私のことに付我家へ參り去者と聞ひて次郎吉ハ少し驚ろきしゞ斯く極めしものを今更ら變す別けにも行ゎねバ其儘善八に逢ふを待ち居たり

第十八回　次郎吉善八ゑ萬事を頼事　並ゑ善八方へ娘の親來る事

去る程に次郎吉は引越しの話ゟも極りしのバ善八の來るを待ちけるところに程なく善八ハ入り來り初對面の挨拶もすみしゝバ婆々の云へるにハ段々お咄しせし處善八さんも承知し

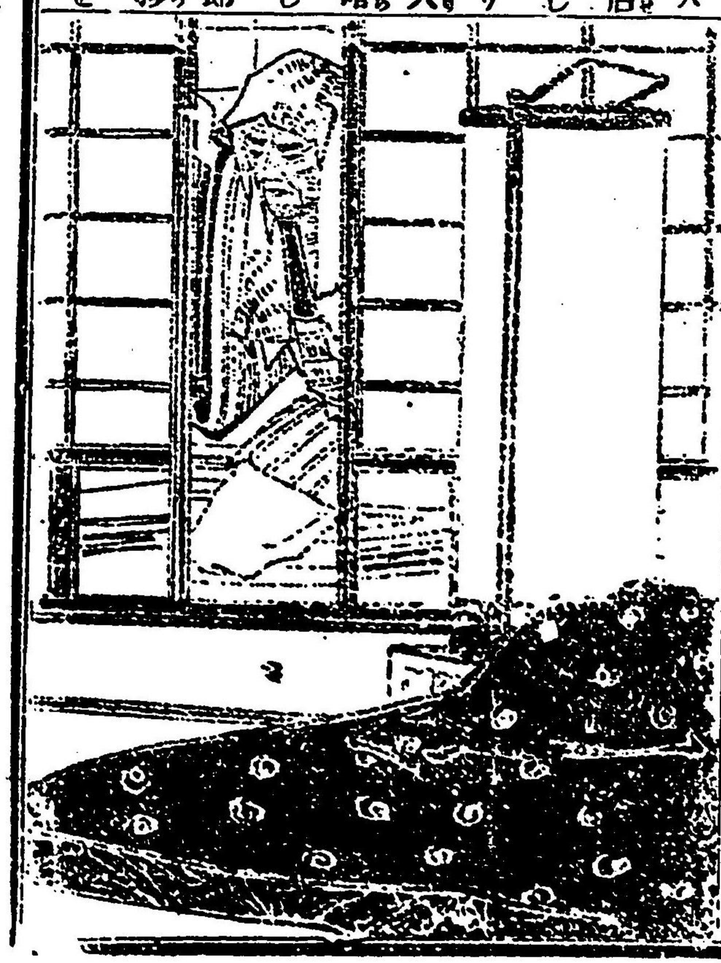
家主の方も取りきまりしゆへ明日ハ早速引移ることに致すべきといへバ次郎吉は喜こびて厚く禮を述べ且つ金百疋を遣わしけれバ善八も殊の外喜こび是より酒肴を開きて暫し酒くみのゐしけるが善八とお吉が顔をつくゝと見て不思儀さふなる面色ありしが知らぬふりして其場ハきり上げ醉を盡して歸りけり明る日ハ早々天王山の下に引移りしが長の間親に逢ねバ三四年の中ハ親吉兵衛の方へ詫言して立入んと旅の疲れを休らひ居ける話代ゐてお吉の父ハ小田原にて娘に逃ふれ途方に暮れしが二十五両の金あれバ年賀の方ハ安心せしゞ去りとて娘を其まゝに棄て置くわけにも行のぬものゝら其足にて直ぐゝ品川に來り善八方を尋ゝに折善く善八も家に居しゆへ早速善八に逢ふて小田原にてあひし事を細かゝ話し偖其人ハ廿五両の金を貰ひゝゆへ一先づ熱田に歸らんとハ思へども左樣すると又た出て來るも面倒ゆへ其足にてお前への方へ斷わり云ゐんと參りゝと金子三百疋を出しお氣の毒あゞら右の次弟ゆへ勘辨してと差出せバ善八ハ喜ひて其金を收め偖不思儀あることゝあれ今お咄しの旅人ハ此の隣へ店を借りて二三日以前引移りしが大分金持の樣子ゆへ率そお娘子の仕合せなりお前も遊妓ゝ爲るより無うし御滿足なふんと云へバ親父は聞ろき并ゝ

又ゝ不思儀なふまとゝもあるものゝあそんなら私の娘も其人と中睦じふして居りますのゝと問へば善八はイヤモウ中ゝ善過ぎるやゞゞ私が橋を渡して親子の對面をさするゝ依り安心して歸り玉へと云へバ親父ゝ涙を溢し懷中より書付よふのものを出して善八に示し斯の通りの文言ゆへ其人に逢ふも極り惡しゝ只だ娘の居所さへ知れゝバ夫ゝ迄て安心せり此の後其娘の事何分お賴申すと親爺ハ早々立歸りぬ次郎吉夫婦は隣りにて始終の樣子を立聞おしゝツトバうりゐ安心せしが娘は後を伏し拜み善くゝアヽ歸て下さんしゝと口には云ねど心のうち涙を溢ゝて喜こびしが是より夫婦ハ睦ゝじく安く月日を送りゝり

第十九回　次郎吉圖らず實父に逢ふ事

次郎吉ハ是よりハ兼て心願の諸侯方又ハ大家のみへ入りて金を取りては貧人へ施こすゆへ人ゐハ親分〳〵と立ふれて日々名ハ揚れども逢ゝさ我親ハ何れへ行きしゝ當の家ハ人手に渡して絶て行衛の知れざりしが不圖猿屋町にて吉兵衛の身の上を聞しに確かに紙屑買に成下りゝとの事ゆへ夫よりハ荐りに下谷の山崎町又は神田の橋本町或ハ芝の新錢座など貧乏人の住ふ場所を探せしかど是れ又た一向ゝ手ごゝろなく空く月日を送り々る或日倩〳〵

思ふよふ是まで金銀を奪ひ取ること數ゑれねど未だ千二千の金を纏めて盗みしことなし願わくば大金を一度に盗みて名を末代に殘さんと心掛けゑゞ或る夜京橋邊を丑の刻時分に通行せゑよ如何あることか藏造りの大家の入口が五六寸ゑのり明々てありしゆへ次郎吉い不審に思ひ斯ゝる大家の町人ゐ似合からぬ不締なり定て店の若者共女郎買よでも行きしあらん幸ひ此の家よ忍び入り三四千纏めた金を盗まんと入口を潜と明て見れば燈火淡暗く見世の若者共い皆な大鼾して前後も知らず臥けゑゞ次郎吉い為の静のゐ提行燈に火を移し土藏の方へ忍び寄り近傍を



見れば傍の一間に隠居と思しき者寐て居しが其上の鴨居に藏の鍵の掛わりけれゞ是幸ひと密と鍵を取り土藏の口に入る錠を明け彼の行燈を照らして金の有所を尋ねしよ別ゐ金と覺しきものもなく中程に穴藏ゝわりけれゞ此の中こそ金あらんと蓋を明けて見ゞ又下に錠前ゆり其鍵を見附けれゞ何れふゐ三やらん知ゑざれゞ手間取りてい叶いとと力を極めて錠前を捻切らんとせしに中々大丈夫にて急ゐは捻切れゑ袂より手拭を取出し手に巻きて錠前を動のせしかゞ其音に驚ろきて眠ゑ覺せし彼の隠居い枕頭を見れゞ藏の鍵のおきゆへ扨ゐ盗賊の入ゝしよと流石

い大家の隠居だゞ少しも騒ゞす見世に至りて番頭を始め殘らず起し皆々支度させて藏の前
よ連行けば若者どもゝ我おそ盗賊を召捕りて手柄にせんと握拳を固めて藏の中を窺がへば
案の如く穴藏の錠前をがた〳〵搖うす樣子よ壯者の中日頃角力を好む者あり々るが第一番
に跳り出で突然土藏の中ゑ飛び入つて己れ盗人と聲を掛々次郎吉の後より無闇と抱付けば
不意を伐れて何堪るべき振りはおさんとしられども終に其所へ押伏せらるれば後なる若者
十四五人ドヤ〳〵と押入りて難あく其所へ縛したり隠居い若者を制しおゞら次郎吉の前に
進み來て見れば血氣の壯者ゆへ心柄とい云ひながら偖〳〵情おき事を仕出したりと心の中
よ愍れみて次郎吉よ云へるよふ一体お前い何所の者か大それた此の所行惡いおとい是れ此
の通り回るも早き因果の返報定めしお前も貧の窮を出來心で仕た事おらんと情も籠る隠居
の言葉よ次郎吉い首を低れ今日こそ天命の盡あるかと心の中にい決すれども辛苦を爲した
る甲斐もあく親吉兵衛よ今日までも逢われぬのが名殘惜と思ひぞホロりと一双膝に涙を落
しゝれば隠居いつく〳〵其顏を見て坐ろよ憐を催ふせしゝば鼻打ゝて若者い共に少し此
れ者に尋ねる事もあれば一先勝手に休息せよと殘らず其所を去らせける跡に隠居い次郎吉

に向ひお前い何所のものあるや我お前の面ざしを見るに何とおく寞を偖すゆへ斯く聞くあ
り耻を云ねば分らぬゞ我事い古い相應の武士なりしが仔細あつて涙々の身となり其頃妻が
腹ゑ宿る子を産墮すや生活に逐るゝまゝ泣〳〵心ある町人の門に捨しが往來の人抱來りて
何方へ行しか絶て分らぬ其時後日の縁もあらばと守囊の中へ我手跡を以て誕生の年号月日
と少さき幼世音を入置たり又鼻の下に黒子二ツありと指を折て年を數へ丁度廿八年あり汝
ゞ姿も丁度廿八九と見へたりと涙を落しつゝ蠟燭を擧げて顏を見れば不思儀や鼻の下に二
ツの黒子あり隠居いヤヽと驚ろき是れ此の黒子と云ひつゝ遽しく首の掛守を取て見れば違
ふ方おき我手跡并びに親世音ありけるば隠居い思わぬ次郎吉ゑ起りついてぞ是悴哉くマア
達者で息才でと云へど我ゞ子い現在に罪を犯せし此の盗賊觀音樣の御加護いあれゝ浅さし
ひ者にい爲りしぞと憂喜一度にぞ来る隠居の心ぞれたわしけれ次郎吉い始終の樣子
を打聞て是まで吉兵衛を誠の親と思ひ思に是が實の父上か我身い捨子でありしかと始て知
りいしたものゝ身い情なき此の始末父上お免ゑ下されと云ふも涙のうるみ聲只ささめ〳〵
と泣き居たり隠居い漸々涙と拂ひ是れ悴之れも前世の因縁づく今更悔むと詮なきことお上

の御厄介に成よりも寧そ父の手に掛り屑よく死で給もとゐへば次郎吉い悪びれも有難ひ父上の仰せィザ首撃て下さもと襟を伸せば「ヲ、能く云ふた夫れでこそ武士の種藤左衛門の悴なりと口でい云へど我子をば親子の對面もろともに冥土の旅ゐ立せるゥと思へば胸い張り裂くばかり刀い持ど腕揮へ足下もるぎて思いずもバッタリ其所に倒れ伏し暫し涙にくれけるが斯くていとて氣を取り直し刀おつ取り起ち上りスラリと拔し氷の刃枠覺悟いよいかと云ふより早く撃下さんとしたる時後の方に聲ありて父上待と飛來りしい开い何者ぞ次回を讀で知りねゥし

第二十回　次郎吉露月町に家を持ち鼠屋忠兵衛と改名する事

父手も實父藤左衛門と聲かけられて後ろを見れば是ゐん此の家の當主ゐて即ち次郎吉の弟あれば何故此の場に來り！ぞといふに當主い暫しと止め始終の樣子は彼れにて聞し只た一人の兄上あれば何ぞ許して給れと父の刀を奪ひ取り早速縛めの繩を解き遊うに下りて手を束へ貴君が刃上で御坐りますか私い藤三郎と申す弟めに御坐りまも何卒今より心を入替へ力に爲りて玉われと涙を溢して諫め歎けど次郎吉は穴へも入りたい心地してイヤ段々の

其御意見是のらい屹度心を入替へますると云へば弟い喜こびて父上兄上ご自きたことと聞しやをさう最ふ大丈夫で御坐ります何ふぞ許して下されましと取り縋りて願みけるゥち店の若者共も入り來り一時の出來心で爲された事私等さへ他言せねば知れる氣遣ひい御坐りませんお許し爲されて下さりませと右左りより取り縋られ心の中い飛立ばかりに嬉しけれども直に許す譯ゐも行ねば夫ゐら皆の者に預けさぞと云ひ捨しまゝ己が部屋にぞ這入りける後に當主の藤三郎い若者共ゐい善く云ひ含め締りを付て休息せ玄め自已い兄の手を取りて己ゲ部屋にぞ立歸り是より次郎吉が是までの履歴を聞しに鼠吉兵衛と云ふものに育られしゲ十六七の頃より惡き事を始め此の程い大坂の邊に彷徨ひて歸り玄に親吉兵衛は實を仕舞て行方知れず何ぞ探し出して恩返しせんものと此所彼所を尋ねしのと未ざに在所分らゼと始終の樣子を聞たる藤三郎は兎に角差ひきの處三十圓の金子ゐ差上れば是ゐて何ゥの支度を爲し其仮親の在所を尋ねて共々我家に來らをゐ其上にて又た商賣の資本金を差上べし最早や夜も明近くゐをば人目にのゝらぬ中一足も早く歸られゐ必らゼ仮親の在所を探玄一日も早く來らるべしと殘る方なき弟の言葉に次郎吉い涙を溢して打喜び出まゝ裏口より立

出て振歸りてい伏拜み伏拜みてい振かへり夢か惚の幻まろ思ひす表に出にける是より次郎吉は品川なる我家に歸りつく〳〵心に思ふよふ斯く實父ふ國らぬ血會する上ど仮親夫婦も探し出し目出度三人打揃ふて京橋なる實の親に引合せ夫より何成とも商賣を始め戯ひ千年親の亡後は潔よ〳〵名乘出て惡事を訴へ御法通りに仕置にあらんと覺悟を極めてありけるが頓て芝露月町に間口三間奥行四間半に土藏付の賣家ありければ之れを買ふて荒物店を開き小僧を傭ひ夫婦三人暮しにて暖簾の家名は鼠屋として名を忠兵衛と改め店開きの日より商賣繁昌せしかば番頭

を置き丁稚を増し今でい家内賑やかに七八人の暮しを爲しにける

第二十一回

次郎吉吉兵衛夫婦に逢我家に連を歸る事

幷に三人連れ立ちて京橋の實親の方へ行く事

又手も次郎吉と何卒吉兵衛夫婦に逢んと日〳〵ゐ所々を尋ぬるうち折節十月時雨降ころ今まで晴し好天氣ゞ驟のに颯と降來りる簇時雨に零時雨を凌がんと下谷善光寺門前の町家の軒下に踞まり居しゐ傍の穢くるしい家の中にて年寄夫婦と覺しき聲音にて何やら話し聲のにるを聞ともなき耳に聞きしに老夫の云ふにゝ指折り數ふをバ丁度廿八年前今產まといふ

捨子を拾ひ乳母や子守と寵愛したる甲斐もあく今でハ何國へ行きしか生死別らず彼何さへあらバ今時分此樣苦勞もせぬものをと云へバ老母ハ傍らより ほんに彼の子ハ今時分何所に何ふして居る事か夫れに付ても生れつき人に秀し利口者世間の人にも譽めそやされ親も人に傲りをよ何の因果で家に居ぬか思へバ哀しき老の身とのこち涙に伏し沈むを表より聞し次郎吉ハ堪ぇ兼て障子を引き明け父さん母さん喜く御無事で次郎吉で御座ります二親樂し不孝の罪お免しあさをて下さりませと突然其所にひれ伏せバ不意を食て二親ハアッケに取られてあゞめ居ゝ々熟々見れバ次郎吉ゆへ吉兵衛夫婦ハ又吃驚善くマア達者で居て呉れたと云ふも先つ涙の聲左り右より次郎吉の背を撫でゝうゞまゝに暫し言葉もあかりゝり次郎吉ハ漸〳〵頭を擡げお厭しや此のれ姿夫に引かへ此の私ハ御両親を打棄て内を外なる放蕩不顧將來ハ吃度心を入れ替へて御恩を送り申しますれバ何卒お許を下されと云ふを母ハ打聞て能あそ歸つて來て呉れさお前の家を出しより内の樣子も段々變り今でハ日々れ煙さへ漸く立つる此の始末夫れゆしても此の年月お前ハ何國に暮せしか委しき事を話してと云へバ次郎吉ハ困りし体にて不了簡より勿体ない御恩を受し御両親を見捨て大坂に立起て一二年ハ

かり居り〳〵りど喜き商賣もあふざれバ夫より復た江戸に歸り四五年も御両親を尋ねしゞ當の堺町ハ疾よと御引越あされしとの事邊りの人々に問合せしゞど何處へお出あさりしか更よれ行衛分り申さぎ其後不思儀なる事より聞ふぎ私を捨し實の親父よ出合其日までハ御両人を實の親と思ひ居しに惜このある証據より實の親ある事分り段々しこ昔話しせしに其親のヤすよふ育てられし両親を探して三人にて我家を尋ね來よ両親の見當る迄ハ足踏ならずとて金子三十両を與たるに依りそれよりハ芝の露月町よ家を求め荒物屋を始めしに幸い繁昌する也へ番頭丁稚も六人程使ひ今でハ店を番頭に任せて日々御両親を探せしに今日願ひの叶いしの此處にて恙なく御両親の御顏拜し誠に嬉しふ存しますと虛實打交物語るを傍に聞居し吉兵衛夫婦ハ涙を溢して打喜ぶ夫あらお前が此頃でハ露月町で荒物屋の鼠屋忠兵衛といふ者ゝ夫れでおそ育てし甲斐ありと云へバ次郎吉ハ二親に向ひ然らバ此の家ハ引拂ひ早速芝に引越し玉へと是より次郎吉ハ店請人へ行て其譯を述べ長屋中へも禮を云ひて早速に此處を引拂ひ吉兵衛夫婦を我家ある露月町へぞ引取りける是より爲て約せし通り吉兵衛夫婦と次郎吉ハ良き日を撰んで京橋なる實父の家に至りけれバ實父親子ハ喜こびて善美を盡

したる料理を調へ目出度茲に親と子と仮親とともに睦まじく酒酌交して千代萬代と語ひ収めし喜こびい他の見る眼も羨やまし

第二十二回　次郎吉お吉に難題の事　並に吉兵衛夫婦死去の事

去る程よ次郎吉い數年の辛苦の届きしか吉兵衛夫婦を家に迎へ如之ならぜ實父ある驥左衛門に圖らぜも廻りあひし嬉しさに日々商賣に骨を折れど何を云ふよも十四五年諸々方々にて働らきし惡事の酬い何時の一度此の島に來るい知れしこと其時俄かに驚くも此身い固より覺悟あれぜ何よも知らぬ吉兵衛夫婦や女房のお吉ゞ痛ましひ夫れに付ても吉兵衛夫婦い先も短りき事あるぜ未だしもの事あれぜ共に白髮と皆ひたるお吉ゞ嘸りし嘆のんと心の中わ夜となく日となく夫のみ案じしが吃度恩案を定めつゝ或る日お吉よ打向ひ事改ためて云ふでいあけれぜ年月副たお前ゆへ定めし己の氣象い知らんが假令亭主の身の上に如何あるべ變事の出來るとも唯心を落付て必ぜ周章ぬよふ心掛よあれある持佛檀の引出しに風呂敷包あれば爰へ持ち來れと云れてお吉い次郎吉が何時に變りし擧動に何やらうすきみ惡けれど云ふがまに〳〵持來れぜ開きて見よと云ふに任せ何氣あく明けて見れぜ道い如何に生々

したたる男の生首お吉ハ吃驚飛び退さて物をも得言はぬ只ざとなく〳〵と震へて居れば次郎吉莞爾と打笑ひ斯ある上ハ其方ハ此の家を死所と定むる氣か又た生て出る氣かと問われてお吉ハ胸を撫り何のマア生て出る氣でゐませう私の死所ハ此の家でゐますと云へば次郎吉ハ笑もあらん死で出るのゞ常なれど世間にハ生て出るものも少あるらゐ依て目出度我家の今日家例を遣るさんと一通の書付を渡すゆへお吉ハ之を開き見れバ思も依らぬ三條半ハッと驚き這ハ離縁狀何故あれバ此の私を離縁爲さるのでゐますと云へ次郎吉ハ打笑て是ゞ即ち我家の嘉例ゆへお吉ゞ此の家を死で出る氣あれば受取り置よ萬一亭主の身お異變ある時は此の離縁狀が役に立事もあらん是れ此の家の先祖ゞ工夫の家例なりと言ハれてお吉は氣には濟まねど亭主の心に戻りては却て惡しと升がまゝに離縁狀をバ受取り置きぬ是より商賣を日々に繁昌せしゞ月に村雲花に嵐吉兵衛夫婦ハ追々取る年とはいへ氣樂に爲せし氣の池みゐや次第に老衰するうちに母は或日風の心地で打臥たるが根とありて經からぬ容体となりしかば次郎吉夫婦ハ看病怠らぬゐる名醫よりゝ為うゞ天命如何とも する能わずして終に冥府の客とありぬ殘り多くハ思へども云て返らぬあとなれバ此の上ハ

父を勞り朝夕神佛ゑ信心して夫婦諸共孝を盡しけれども是も老衰の身の上ゆへ不圖ゝた事が病となり竟ゑ空しくなりけれバ夫婦ハ悲嘆の涙にくれまか偖あるべきにあらざれハ注〳〵野邊の送りとゝ營み忌日命日の追善等も怠らぬ最と懇に吊ひ給る

第二十三回　次郎吉淀辰に逢ふ事　並に淀辰を鈴ゞ森に殺す事

偖も次郎吉ハ或日の事日暮際にあり老のバ例の通り店を片づけ番頭相手に勘定せしに表にドヤ〳〵人聲ありてソレ盜賊ゑ彼方へ往た此方へ逃たと逐うくるうちバラ〳〵と駈け來し一人の男頬冠せしまゝ鼠屋の見世に飛込みて隅の方へ屈みしかバ見世の者ハ驚きしゞ其中往來の人ハ駈拔けて表も穩やかに爲りけれバ彼の男ハ頬冠を取りて真平お免し下されまし御挨拶も致さぜお店を拜借して申譯も御坐りませんと云ひつゝ次郎吉と顔見合せヤゝお前ハ次郎吉どの左樣ハふお前ハ淀屋の親方善ひ所にてお目にかゝりし先づ此方へと上に伴なひ一別以來の禮儀も濟て次郎吉と如何して此方へお出向にやと問へバ淀辰は膝をすゝめお前ゞ大坂を立退てより彼の放火一件より嚴しひ詮儀其中子分が二三十両の事にて食ひ込みお前の事まで白狀せゑゆへ愚圖〳〵すれば此の私まで食ひ込むは知れさあと足のつかあへ

其中にと子分の勸めにさふかつて此の江戸へ來てゐ見たが今の樣なる災難ばかりにぜんぶひて食ひ込み江戸に耻を曝すのも餘り出來た事でもなへと倩々思へば一刻も江戸にはるのが忌にあり田舍廻りに出掛よふと路金稼でやりそこなつてお前に逢のも面目なへと一ぶ始終うの物語りに次郎吉は氣の毒に思ひ私もお前にゐ一通りならぬ厄介にもなりされば隱ひ度は思へども何を云ふも此の通り眞じめな商賣に變つて見れば左樣云ふ譯にも些と行き兼てゞ是れゐ餘まり少あひが路金の印にと傍なる用簞笥より二百兩の金を其處へ差出せゞ淀辰大に喜びて誠に濟まぬことながら暫時の間借りて行くと早迷惑に收ければ是より二人酒酌交し暫し去し昔語りに時を移せしが兎に角今宵の中に江戸の地ゐ離れたしと云ふに次郎吉も止めてゐ返つて爲惡しゝと別段引止もせず何れへ足を向らるゝやと問ゞ矢張東海道筋にせんといふに任せて然ふば名殘に其處らまで見送ふんと扉より二人連立て露月町を出でにけゐ暫ふくして品川も過ぎ鈴ヶ森に來りし頃ゐ早や九ツ半頃にて蚤さへ寒き刑場あをゞ何とあふ身の毛よだち近邊寂寞として聞ゆるものゐ犬の遠吠と浪打昔のみ次郎吉ゐ跡先を見廻し淀辰を遣り過して後ろへ廻り兄さ免して呉と云ふより早く電光一閃左の肩先より六七すけさがけよ斬付ゞゞ淀辰アッと聲立て振り向く所を首筋眼がゞ又一刀あびせうけれゞ何うわ以て堪るべき堂と其場に倒れけるを次郎吉ゐホッと息つき兄き濟ねへゞ免して呉れ何を隱そふ此の已にゐ只た獨りの親父がある其を水取ふぬ其中は已には堂しても死ねあへゆへ彼して眞じめな家業をそるのゞ夫れをお前に家を見られ若しもの時に吐れゐ切角の辛苦も水の泡決して二百や三百の金ゞ惜かアあへのゞうら何ふゞ成佛して呉れあ親父を水取つた其後は立派に名乘て仕置を受け地獄へ行て言別する南無阿彌陀佛と云ひながら死骸に跨り止めを差し置いて行くも無ゞありと二百兩の金を奪ひ死骸ゐ海に投け込んで其儘我家へ歸りける

第二十四回 大團結

日明し初五郎次郎吉を付る事
並ゐ鼠小僧お仕置の事

斯る所ゐ最前より始終の樣子を立聞したる拭破の初五郎と云へるゞ次郎吉の後を付れゞ芝露月町ある商家へ入りしもへ篤と見屆け置早速此の事を探偵者の甚太といふものに知らせしのゞ甚太ゐ又ゞ役人衆に報じ其夜の明方召捕の人數を差向ける次郎吉は兼て二階ゐ寢て

居しゞ上意との壁を聞て早くも用意の刀を引き拔きく來らゞ斬んと携へる所へ捕方ども忽ちドヤ〳〵と入り來るを表も裏も振らぎ斬て入り刀の眼釘の續さけ縱横微塵に荒れ廻れゞ捕方も困ぎはてしゞ多勢に不勢竟に敵せず忽ち其處お捕れたり是より奉行小田切土佐守の掛りにて段々糺彈られしに天網遁れ難く遂に左の如くお仕置あり〻

天保三辰年八月十九日落着

異名鼠小僧事

無宿入墨　次郎吉　辰三十六歳

此もの儀十年以前未年以來處々武家屋敷二十八ヶ所度數三十二度塀を乘越へ又ハ通用門より紛入り長局奥向へ忍入り錠前を固辭明々或は土藏の戸を鑿にて挑切り金七百五十一兩一分錢七貫五百文程盗取り遣捨て候後武家屋敷へ通入りハ得共盗得ぎしハ所被召捕數ヶ所にて盗致し候儀ハ押包み博奕數度致し候旨申立右科に依り入墨の上中追放相成候所入墨を消紛ひし猶惡事不相止尚又武家屋敷七十一ヶ所度數九十度右同樣の手續よて長局奥向へ忍入り金二千三百三十四兩二分錢三百七十二文銀四文目三分盗取り右体御仕置よ相成候以後の盗ヶ所都合九十九ヶ所度數百二十二度の内屋敷名前失念又ハ不覺金銀不盗取も有之凡そ金高三千百二十一兩二分錢九貫二百六十文銀四文目三分の内古金五兩錢七百文ハ取捨其餘ハ不殘酒食遊興又ハ博奕を渡世同樣に致し在方處々へも持參不殘遣捨て候始末不屆至極に付引廻わしの上於淺草獄門ゟ行なふもの也

次吉郎引廻わしのときの衣服ハ紺ちゝみ帷子白かさね付を着し帯黄糸とつさん白足袋ふとくら草履黑天鵞絨腹ごけ紫ふさの珠數を持ち顔に薄化粧して口べにをさしたりと其時詠める歌

天の下ふるきさめまい白波のみこそ鼠とあらわれおける

今ま次郎吉ゞ一生に忍び入りて金錢を竊みし大小名を擧れゞ左の如し

水戸殿　清水殿　水野出羽守　松平周防守　林肥後守
久世鎌吉　松平備前守　松平安藝守　松平出羽守　牧野越中守
戸田采女正　伊達遠江守　一橋殿　尾張殿　大久保加賀守

松平伯耆守　平岡石見守　土井大炊頭　松平大隅守　松平越中守
有馬玄蕃頭　松平陸奥守　松平伊豫守　松平大學頭　田安殿
紀伊殿　松平和泉守　永井肥前守　松平讃岐守　松平三河守
松平因幡守　松平大和守　上杉彈正大弼　酒井雅樂頭　松平甲斐守
酒井左衛門尉　石井中務少輔　大久保佐渡守　細川越中守　松平左京大夫
松平采女正　石川主殿頭　榊原式部大輔　藤堂和泉守　土井金三郎
松平肥後守　牧野備前守　松平土佐守　眞田伊豆守　佐竹右京大夫
井伊掃部頭　松平備後守　加藤遠江守　小笠原佐渡守　松浦肥前守
松平大膳大夫　西尾隱岐守　稻葉備中守　新庄主殿頭　松平阿波守
本多豐前守　森藤藏　戸田因幡守　青山房次郎　稻葉丹後守
酒井修理大夫　有馬兵庫頭　溝口信濃守　松平信濃守　津輕越中守
松平左兵衛督　阿部能登守　小笠原大膳大夫　松平伊賀守　六卿能登守
加藤能登守　南部信濃守　細川長門守　分部虎之助　松平河內守

堀内藏頭　小出信濃守　戸田阿波守　小堀紙部　阿部山城守
酒井石見守　奥山主税助　前田大和守　仁賀保孫九郎
右惣計八十八軒

次郎吉の墓ハ両國回向院よあり世の不學の徒次郎吉を目して義賊と爲せど義に非て賊を爲すものハあらざるべし

編者曰す人間一人の履歴ハ容易ならぬものなり限りある紙に容易あらぬ履歴を寫す其一斑ざも猶載すべからず今ま此の刑罰の申渡を見て其履歴の同じからざる所あるも看るもの深く咎め匡ふな

鼠小僧白浪双紙下卷大尾

明治十七年一月九日出版御屆
同　年四月十四日出版
同　十八年十月廿九日別製再版御屆
同　年十一月日出版

定價金四拾錢

編輯兼出版人　岐阜縣平民　和田篤太郎　京橋區南傳馬町二丁目十四番地

發兌　春陽堂　京橋區南傳馬町一町目十四番地

東京圖書館

和書門	類	一函	二架	六〇號	一冊